修道

No. 65

題字は吉田学(高21)書

修道学園同窓会連合会
修道学園（中・高）同窓会
〒730-0055 広島市中区南千田西町8-1
TEL(082)241－8291　FAX(082)249－0870
TEL(082)241－6686(同窓会直通)
E-mail dosokai@shudo-h.ed.jp
URL http://www.shudo-h.ed.jp/dosokai/

「同窓会連合会と（中・高）同窓会合同評議員会・幹事会の様子」（平成20年3月26日）

目　次

同窓会ニュース

同窓会連合会・(中・高)同窓会幹事・監査改選……1318
新役員承認・平成20年度予算案承認……1321
平成19年度決算を承認……1325

支部だより

「2008年度修道学園同窓会関東支部の集い」についてのご報告…三戸森茂治…1327
第14回江能修友会総会……胡子　雅信…1328

同期会報告

米寿の同期会……森信　毅…1329
卒業以来71年目の同期会…北川洸太郎…1330
四期会総会報告……河野富士雄…1331
修道高五回「高野山・熊野三山と那智・勝浦温泉の旅」に参加して……中村　陽一…1332
韓国訪問の旅……長野　昌敏…1335

特別寄稿

山田養吉先生の「丙寅日記」を読む…畠　眞實…1337

学園だより

修学旅行報告……片山　行弘…1353

人物往来

JRN・JNNアノンシスト賞テレビ「読み・ナレーション部門」最優秀賞受賞…本名　正憲…1355
若手育成に夢を抱くアマチュアゴルフ界の星…田村　尚之…1355
石に聞く……畠　眞實…1356
全力プレー引き出す……三王　知治…1356
香川龍介君の個展を祝して…林　孝治…1356
近況報告……加藤　省吾…1358
上田流和風堂江戸期の上屋敷を再現…上田　宗冏…1358
公園トイレ設計提案競技最優秀賞受賞…小川　文象…1358

ご就任おめでとうございます

環境大臣ご就任……斉藤　鉄夫…1359
内閣府副大臣ご就任……増原　義剛…1359

春の叙勲受賞おめでとうございます

旭日双光章受章……山下　泉…1359
永年勤続20年表彰おめでとうございます(中間信一・山本　一)…1359

事務局だより

修道の大先輩
元内閣総理大臣 加藤友三郎子爵の銅像が完成…1359
加藤友三郎　功績碑文……1361
吉田拓郎歌碑除幕式、盛大に開催される……1362

訃　報……1362

同窓会ニュース

同窓会連合会・(中・高)同窓会幹事・監査改選合同評議員会開く

平成20年３月26日
同窓会連合会、（中・高）同窓会評議員会

合同評議員会記録

日　時：平成20年３月26日(水) 18:00～18:15
場　所：ホテルセンチュリー21　２階フォルザ

議事及び審議の結果

議案の審議に先立ち、修道学園（中・高）同窓会及び修道学園同窓会連合会との合同評議員会を開催する旨の宣言がなされた。

大田哲哉同窓会連合会会長代理から開会の挨拶があり、慣例により大田会長代理が議長となることが承認された。

議案

１．幹事及び監査の選出について

事務局より、幹事・監査の選出にあたり、修道学園（中・高）同窓会会則第８条の説明がなされた。その後大田議長より、幹事・監査については、先に開催された正副会長会議で検討した改選案を提示したい旨の説明がなされ、異議なしとの声を受け、修道学園（中・高）同窓会幹事・監査（案）が配布され、審議の結果改選案が承認された。

辞　任　中間　信一　（監査　高校13回）
新　任　蔵田　　修　（監査　高校30回）
　　名和原　寛　（幹事　高校51回）

その他の幹事・監査については全員留任となった。

続いて事務局より、幹事・監査の選出にあたり、修道学園同窓会連合会会則第９条の説明がなされた。その後、大田議長より幹事・監査については先に開催された正副会長会議で検討した改選案を提案したい旨の説明がなされ、異議なしとの声を受け、修道学園同窓会連合会幹事・監査（案）が配布され、審議の結果改選案が承認された。

辞　任　宮本　英昭　（幹事　大商11回）
　　程川　道彦　（幹事　大法２回）
　　中間　信一　（監査　高校13回）
新　任　牛尾　克美　（幹事　大商14回）
　　谷本　圭一　（幹事　大商22回）
　　船倉　智雄　（監査　高校24回）

その他の幹事・監査については全員留任となった。

任期は平成20年４月１日から平成23年３月31日まで。

大田議長より、辞任された方々に対して、これまでのご尽力に感謝の言葉が述べられ、また、新たに選任された幹事・監査の皆様には今後３年間、同窓会活動のため格別のご協力をいただきたい旨の挨拶がなされた。

修道学園（中・高）同窓会

幹事	河野徳男	旧中34	幹事	佐伯正道	高 25
	藤原幹	旧中39		中本憲治	高 26
	阿曽沼龍雄	高 1		福原俊二	高 27
	下村幸雄	高 2		廣谷清	高 28
	仁井田幸雄	高 3		久保田文也	高 28
	菊田良三	高 4		和田章宏	高 29
	上向井快三	高 5		中村靖富満	高 30
	鵜野俊雄	高 6		仮田典久	高 31
	奥窪和夫	高 6		新藤幸次郎	高 32
	森本弘道	高 7		佐々木明	高 33
	大下龍介	高 7		川崎博行	高 34
	山下泉	高 7		井上徹	高 35
	大塚淳八郎	高 8		大内茂稔	高 36
	浅尾宰正	高 9		久保康治	高 37
	高木一之	高 10		大方幸一郎	高 38
	大田哲哉	高 11		北村直幸	高 39
	桐林正樹	高 11		田戸亨	高 40
	土井洋二	高 12		西田天次	高 41
	山根恒弘	高 13		佐野智	高 42
	貫名賢	高 14		西尾尚士	高 43
	天倉康博	高 14		浅川智洋	高 44
	藤原正孝	高 15		田中健太郎	高 45
	上田宗冏	高 16		藤山英人	高 46
	増原義剛	高 16		上垣内裕輔	高 47
	今井誠則	高 17		三宅泰雄	高 48
	笹野正明	高 18		住田進	高 49
	山本一	高 19		小川文象	高 50
	伊藤學人	高 20		名和原寛	高 51
	藤居道正	高 21	監査	船倉智雄	高 24
	河口龍太郎	高 22		蔵田修	高 30
	中本高明	高 23		中島弘規	高 33
	松田弘	高 24			

幹事60名・監査3名

修道学園同窓会連合会

幹事	河野徳男	旧中34
	藤原幹	旧中39
	阿曽沼龍雄	高 1
	下村幸雄	高 2
	仁井田幸雄	高 3
	菊田良三	高 4
	上向井快三	高 5
	鵜野俊雄	高 6
	奥窪和夫	高 6
	大下龍介	高 7
	山下泉	高 7
	大塚淳八郎	高 8
	高木一之	高 10
	大田哲哉	高 11
	桐林正樹	高 11
	土井洋二	高 12
	山根恒弘	高 13
	貫名賢	高 14
	天倉康博	高 14
	藤原正孝	高 15
	上田宗岡	高 16
	増原義剛	高 16
	今井誠則	高 17
	笹野正明	高 18
	山本一	高 19
	伊藤學人	高 20
	藤居道正	高 21
	河口龍太郎	高 22
	中本高明	高 23
	松田弘	高 24
	加藤省吾	大商 1

幹事	武安紘二	大商 1
	児玉憲三	大商 1
	山本繁生	大商 1
	上野淳次	大商 3
	田村治重	大商 3
	山野立男	大商 3
	岸英雄	大商 4
	吉田只五郎	大商 4
	細田信行	大商 8
	庄子佳良	大商11
	松井敏	大商11
	岡本幸士	大商13
	近藤博樹	大商13
	牛尾克美	大商14
	川本幸生	大商17
	篠原敦子	大商18
	住田敏	大商22
	谷本圭一	大商22
	江川純一	大人 1
	平田誠治	大法 4
	久保弘睦	短一 4
	堀内武彦	短一 4
	林春樹	短二 5
	畑尻隆司	短二 7
	西林洋治	短二20
	脇浦則行	大院 1
	佐々木慶市	大院 4
監査	船倉智雄	高 24
	辻誠治	大商 2
	酒井一成	大院 4

幹事58名・監査３名

同窓会ニュース

新役員承認・平成20年度予算案承認

平成20年3月26日
同窓会連合会、(中・高)同窓会幹事会

合同幹事会記録

日　時：平成20年3月26日(水)　18:15～19:00
場　所：ホテルセンチュリー21　2階フォルザ

出席者（敬称略）

《幹事》

大田　哲哉　　髙木　一之　　土井　洋二
貫名　　賢　　伊藤　學人　　松田　　弘
廣谷　　清　　中村靖富満　　上野　淳次
脇浦　則行　　藤原　　幹　　下村　幸男
仁井田幸雄　　菊田　良三（代理：河野富士雄）
上向井快三（代理：佐伯　正司）
奥窪　和夫　　森本　弘道　　山下　　泉
大塚淳八郎　　浅尾　宰正　　桐林　正樹
天倉　康博　　増原　義剛（代理：菊崎　賢）
今井　誠則　　笹野　正明　　山本　　一
藤居　道正　　河口龍太郎　　中本　高明
中本　憲治　　福原　俊二　　和田　章宏
仮田　典久　　川崎　博行　　大方幸一郎
北村　直幸　　田戸　　亨　　西田　天次
小川　文象　　山本　繁生　　細田　信行
庄子　佳良　　谷本　圭一　　久保　弘睦
畑尻　隆司　　佐々木慶市

《監査》

船倉　智雄　　蔵田　　修　　中島　弘規
辻　　誠治　　酒井　一成

《事務局》

田中　佳樹　　近川　俊治　　大橋　康雄
若宮　寿仁　　石井健二郎

《同窓大会世話人》

高校52回世話人

議事及び審議の結果

議案の審議に先立ち、修道学園（中・高）同窓会及び修道学園同窓会連合会との合同幹事会を開催する旨の宣言がなされた。

大田哲哉同窓会連合会会長代理から開会の挨拶があり、慣例により大田会長代理が議長となることが了承された。

議案

1．役員等の選出について

事務局より、（中・高）同窓会役員の選出にあたり、修道学園（中・高）同窓会会則第8条の説明がなされた。その後大田議長より、先に開催した正副会長会議で検討した改選案を提案したい旨の説明がなされ、異議なしとの声を受け、修道学園（中・高）同窓会役員（案）が配布され、審議の結果改選案が承認された。

今回辞任・新任はなく全員留任となった。

続いて事務局より、同窓会連合会役員の選出にあたり、修道学園同窓会連合会会則第9条の説明がなされた。その後大田議長より、先に開催した正副会長会議で検討した改選案を提案したい旨の説明がなされ、異議なしとの声を受け、修道学園同窓会連合会役員（案）が配布され、審議の結果改選案が承認された。

今回辞任・新任はなく全員留任となった。

任期は平成20年4月1日から平成23年3月31日まで。

大田議長より選任された役員の皆様には今後3年間同窓会活動のため格別のご協力をいただきたい旨の挨拶がなされた。

修道学園(中・高)同窓会名誉会長・会長・会長代理・副会長

名誉会長	森本弘道	高 7
	大下龍介	高 7
会長	大田哲哉	高 11
会長代理	高木一之	高 10
副会長	土井洋二	高 12
	貫名賢	高 14
	伊藤學人	高 20
	松田弘	高 24
	廣谷清	高 28
	中村靖富満	高 30

修道学園同窓会連合会名誉会長・会長・会長代理・副会長

名誉会長	森本弘道	高 7
会長	大下龍介	高 7
会長代理	大田哲哉	高 11
副会長	上野淳次	大商3
	脇浦則行	大院1

2．会誌名簿委員の委嘱について

会誌名簿委員については、会則第9条に定めてあるとおり、会長の委嘱事項となっており、配布する資料のメンバーにご協力をいただきたい旨の説明がなされた。

辞任　河野　高信　(高校23回)
　　久保田文也　(高校28回)
　　網野　公泰　(高校34回)
新任　三浦　陽治　(高校28回)
　　仮田　典久　(高校31回)
　　川崎　博行　(高校34回)
　　井東　康三　(高校40回)

大田議長よりこのたび辞任された委員の皆様には、これまでのご尽力に感謝申しあげるとともに今回選任された委員の皆様には今後3年間名簿作製のため格別のご協力をいただきたい旨の挨拶がなされた。任期は平成20年4月1日から平成23年3月31日まで。

修道学園（中・高）同窓会会誌名簿委員

委員長	中村靖富満	高 30
委員	山本一	高 19
	穴田一善	高 20
	三浦陽治	高 28
	仮田典久	高 31
	川崎博行	高 34
	大方幸一郎	高 38
	井東康三	高 40
担当副会長	土井洋二	高 12

3．学園評議員・理事候補の選任について

大田会長より、学園評議員及び理事候補者の推薦にあたり、同窓会連合会会則の申し合わせ事項の説明がなされ、正副会長会議で検討された学園評議員・理事候補者（案）が全会一致で承認された。

今回評議員及び理事候補者に辞任・新任はなく全員留任となった。

修道学園評議員

評議員	河野徳男	旧中33
	高木一之	高 10
	山下泉	高 7
	大塚淳八郎	高 8
	大田哲哉	高 11
	土井洋二	高 12
	貫名賢	高 14
	上田宗冏	高 16
	伊藤學人	高 20
	松田弘	高 24
	加藤省吾	大商1
	上野淳次	大商3
	岸英雄	大商4
	松井敏	大商11
	堀内武彦	短一4
	林春樹	短二5

修道学園理事

理事	大田哲哉	高 11
	高木一之	高 10
	上野淳次	大商3
	岸英雄	大商4

4．同窓大会について

大田会長より、例年開催している修道学園（中・高）同窓大会が近時、関係者のご努力にもかかわらず、参加者が年々減少傾向にあり、関東支部の総会運営のように幅広い年齢構成のもとで開催することにより、本部広島での同窓大会でより一層の同窓の絆を深める機会にしてゆくためには、これまでの卒業後8年目の後輩諸君に大会の企画・運営をお願いするだけでは、その実を揚げることが難しい状況にある。よって今年度の同窓大会より年齢を超えた多くの同窓の皆様にご協力をいただき、これまでにも増して盛大な同窓大会を開催いたしたく、先般開催した正副会長会議において、検討の結果、高校52回生をはじめ、2回、12回、

22回、32回及び42回の先輩諸氏にご指導をいただくことをお願いした。今後の大会については、卒業後8年目の皆さんと10年ごと遡った、各期の先輩各位に企画・運営のお世話をお願いすることのルール化を図りたいと考えている旨の説明があった。

審議の結果、全会一致で異議なく了承された。

5．故加藤友三郎子爵銅像復元に係る寄付金について

先般銅像復元委員会の碓井静照委員長（高校8回）から、広島県出身で最初の内閣総理大臣であり、修道の大先輩であることから、ぜひ同窓会からも寄付願えないかとのお話しがあり、大下同窓会連合会長にこの旨を伝え、相談させていただいた結果、同窓会連合会として、応分の寄付をすることでご快諾をいただいた。先に開催された正副会長会議において、200万円を寄付することの了解を得たので、この旨ご賛同いただくべくお諮りをしたいとの説明がなされ、審議の結果、全会一致で異議なく了承された。

6．平成20年度修道学園（中・高）同窓会予算について

平成20年度修道学園（中・高）同窓会資金収支予算書（案）について事務局から説明がなされた。収入の部は、入会金846,000円　終身会費1,974,000円　名簿売上代1,000円　預金利息160,000円　雑収入500,000円　事業基金引当特定預金からの繰入収入1,000円　名簿作製引当特定預金からの繰入収入1,000円　陶板画レプリカ売上代150,000円　小計は3,633,000円となり、前年度繰越金23,929,000円を合わせると、**収入の部の合計は27,562,000円となる。**支出の部は、事業費1,666,000円（内訳：名簿作製費1,000円　激励費500,000円　同窓大会補助金200,000円　その他の事業費965,000円）　業務費955,000円（内訳：会議費320,000円　通信費285,000円　慶弔費200,000円　諸費150,000円）　その他の支出379,000円（内訳：連合会分担金282,000円　事業基金引当特定預金への繰入支出96,000円　名簿作製引当特定預金への繰入支出1,000円）　予備費500,000円　小計は3,500,000円となり、**収入合計から差し引いた次年度繰越金は24,062,000円となる。支出の部の合計は27,562,000円となる。**

続いて、平成20年度修道学園同窓会連合会資金収支予算書（案）について事務局から説明がなされた。収入の部は、分担金1,396,000円　預金利息83,000円　雑収入1,000円　事業基金引当特定預金からの繰入収入1,000円　小計は1,481,000円となり、前年度繰越金17,605,000円と合わせると**収入の部は19,086,000円となる。**支出の部は、事業費350,000円　業務費720,000円（内訳：会議費320,000円　通信費150,000円　慶弔費150,000円　諸費100,000円）　特別事業費2,000,000円（故加藤友三郎子爵銅像復元に係る寄付金）その他の支出33,000円（内訳：事業基金引当特定預金への繰入支出32,000円　名簿作製引当特定預金への繰入支出1,000円）　予備費500,000円　小計3,603,000円となり、**収入合計から差し引いた次年度繰越金は15,483,000円となる。支出の部の合計は19,086,000円となる。**

以上、（中・高）同窓会予算および同窓会連合会予算は審議の結果原案どおり承認された。

広島修道大学同窓会からの報告

上野淳次会長より、同窓大会については今年度についても11月の第1土曜日に開催する旨の報告があった。

広島修道大学大学院同窓会からの報告

脇浦則行名誉会長より、同窓大会については6月28日(土)17：00よりホテルＪＡＬシティー広島にて開催する旨の報告があった。

松田担当副会長からの報告

9月6日(土)18時からリーガロイヤルホテル広島で開催する旨の報告がなされた。その後、世話人の田村勇太氏より、お力添えをお願いしたい旨の挨拶がなされた。

この後、懇親会が開催され、盛会裡のうちに午後8時30分散会となった。

会議の模様

席上挨拶される平成20年度中・高同窓大会
松田弘担当副会長・世話人の諸氏

懇親会の模様

同窓会ニュース

平成19年度決算を承認

平成20年6月6日
同窓会連合会、(中・高)同窓会幹事会

合同幹事会記録

日　時：平成20年6月6日(金)　18:30～19:00
場所：修道中学校・修道高等学校
　　本館3階　大会議室

出席者（敬称略）

《幹事》

大田　哲哉　　土井　洋二　　貫名　　賢
伊藤　學人　　松田　　弘　　中村靖富満
上野　淳次　　脇浦　則行　　藤原　　幹
下村　幸男　　仁井田幸雄
菊田　良三（代理　河野富士雄）
桐林　正樹　　増原　義剛（代理：菊崎　賢）
今井　誠則　　山本　　一　　藤居　道正
福原　俊二　　和田　章宏（代理：佐々木　忠）
久保　康治　　大方幸一郎（代理：筒井　直樹）
北村　直幸（代理：西村　昌浩）
佐野　　智　　住田　　進　　小川　文象
名和原　寛　　細田　信行　　篠原　敦子
住田　　敏　　佐々木慶市

《監査》

蔵田　　修　　中島　弘規

《事務局》

田中　佳樹　　近川　俊治　　大橋　康雄
若宮　寿仁　　石井健二郎

《中・高同窓大会世話人》

田村　勇太　　安本　芳朗　　吉村　誠司

議事及び審議の結果

議案の審議に先立ち、修道学園同窓会連合会及び修道学園（中・高）同窓会との合同幹事会を開催する旨の宣言がなされた。

大田　哲哉同窓会連合会会長代理から開会の挨拶があった後、慣例により大田　哲哉同窓会連合会会長代理が議長となることが承認された。

議案

1．正会員登録について

事務局より、奥本　博（おくもと　ひろし）氏（該当回数旧中39回）を（中・高）同窓会会則第5条第2号により正会員登録したい旨の説明がなされ、承認された。

2．平成19年度修道学園同窓会連合会収支決算について

事務局より、平成19年度修道学園同窓会連合会資金収支決算書について説明がなされた。収入の部は、分担金1,431,000円、預金利息85,980円、雑収入0円、事業基金引当特定預金からの繰入収入0円、小計1,516,980円となり、前年度繰越金16,954,142円を合わせると、**収入の部の合計は18,471,122円となる。**支出の部は、事業費329,700円、業務費470,340円（内訳：会議費159,037円、通信費119,707円、慶弔費105,750円、諸費85,846円）、その他の支出83,443円（内訳：事業基金引当特定預金への繰入支出82,717円、名簿作成引当特定預金への繰入支出726円）予備費0円、小計883,483円となり、収入合計から差し引いた**次年度繰越金は17,587,639円となる。支出の部の合計は18,471,122円となる。**

次に貸借対照表についての説明が行なわれ、資産の部は事業基金引当特定預金7,733,457円、名簿作製引当特定預金505,453円、一般会計預金17,587,639円となっている。負債・正味財産の部は、合計25,826,549円となっており負債は

ない。

続いて、中島弘規監査より、証憑、帳簿、預金通帳等の関係書類を監査した結果、いずれも適正に執行、管理されていた旨の会計監査報告がなされた。

同窓会連合会決算は、全員異議なく承認された。

3．平成19年度修道学園（中・高）同窓会資金収支決算について

事務局より、平成19年度修道学園（中・高）同窓会収支決算書について説明がなされた。収入の部は、入会金867,000円、終身会費2,023,000円、名簿売上代0円、預金利息165,450円、雑収入518,058円、事業基金引当特定預金からの繰入収入0円、名簿作製引当特定預金からの繰入収入0円、陶板画レプリカ売上代300,000円、小計3,873,508円となり、前年度繰越金23,857,408円と合わせると、**収入の部の合計は27,730,916円となる。**支出の部は、事業費2,189,519円（内訳：名簿作製費0円、激励費570,000円、同窓大会補助金200,000円、募金事業費0円、その他の事業費1,419,519円）、業務費1,064,346円（内訳：会議費287,378円、通信費423,631円、慶弔費210,500円、諸費142,837円）、その他の支出391,215円（内訳：連合会分担金289,000円、事業基金引当特定預金への繰入支出102,215円、名簿作製引当特定預金への繰入支出0円）、予備費0円、小計3,645,080円となり、収入合計から差し引いた**次年度繰越金は24,085,836円となる。支出の部の合計は27,730,916円となる。**

次に貸借対照表についての説明が行なわれ、資産の部は事業基金引当特定預金19,320,931円、一般会計預金は24,085,836円となっている。負債・正味財産の部は、合計43,406,767円となっており負債はない。

続いて平成19年度修道学園（中・高）同窓大会について伊藤學人担当副会長より報告があり、続いて同窓大会世話人より平成19年度修道学園（中・高）同窓大会決算書についての説明がなされた。収入の部は、補助金200,000円、大会誌広告協賛3,084,800円、会員券裏面広告協賛150,000円、会員券売上2,309,370円、寄付金190,000円、預金利息1,909円、**収入の部の合計は5,936,079円となっている。**支出の部は、大会誌作製費2,126,250円、大会運営費2,016,977円、広告宣伝費297,780円、事務費11,970円、通信費188,713円、交通費1,370円、会議費56,847円、振込手数料3,465円、収入から差し引いた**余剰金は1,232,707円で、平成20年度において本会計へ繰り入れる予定である旨の説明がなされた。支出の部の合計は5,936,079円となる。**

続いて、蔵田修監査より、証憑、帳簿、預金通帳等の関係書類を監査した結果、いずれも適正に執行、管理されていた旨の会計監査報告がなされた。

中・高同窓会及び同窓大会決算は全員異議なく承認された。

4．平成20年度修道学園（中・高）同窓会収支予算の補正について

事務局より平成20年5月22日開催の平成19年度修道学園（中・高）同窓会決算監査時において、資金支出の部大科目「事業費」にある「その他の事業費」は、卒業記念品料がその大半を占め、金額的にも多いため、勘定科目を分けて会計処理をするようにとの指摘があったことにより、平成20年度収支予算を補正することとしたい。

補正予算は全員異議なく承認された。

5．報告事項

1．平成20年度修道学園（中・高）同窓大会・支部総会及び同期会の開催について

資料にもとづき説明がなされた。

2．（中・高）同窓大会について

同窓大会松田　弘担当副会長から、今年度はこれまで以上に盛大な大会にしたいとの抱負が語られた。この後世話人によるチケット配布を行い散会となった。

支部だより

「2008年修道学園同窓会関東支部の集い」についてのご報告

三戸森　茂　治（高18回）

平成20年７月14日月曜日、東京ドームホテルにて「2008年修道学園同窓会関東支部の集い」を開催いたしました。

同窓生の皆様には、予め往復葉書にてご案内を差し上げ出欠の確認を取っているのですが、当日の天候が乱れれば出席のご返事をいただいていても急遽欠席される方も多く、天候も同窓会事務局、実行委員泣かせですが、大きな天候の乱れもなく、来賓８名、卒業生473名、同伴者15名の盛会となりました。

今回の集いの実行委員会は、修道高校８、18、28、38、48、58回卒業の８の期の担当です。同窓会関東支部継続・発展のためにも若い同窓生をどう集めるか、毎年事務局、実行委員会とも頭を悩ませているところです。今年の集いのテーマは「伝統と遊び心」としました。伝統ある母校の同窓会に、若い時の様にちょっぴりの遊び心を持って集えればとの思いです。

講演、総会を通じての司会は現在ＮＨＫＢＳ放送で毎日東京マーケット情報に出演されているフリーアナウンサーの佐藤真由美さんにお願いしました。佐藤さんは東京出身で、アナウンサーとしてのスタートを広島ホームテレビで始められたとのこと。快く引き受けていただきました。

講演は８回の森健兒さん。日本サッカー協会元専務理事、Ｊリーグ元専務理事の経歴をもっておられＪリーグの立ち上げに尽力されました。「プロスポーツとは何か？（Ｊリーグの誕生と現状)」というテーマで興味深い講演をしていただきました。

講演会場から総会会場の「天空の間」に会場を移すと、若い女性15名によるダンシングチームのサンバを皮切りに総会が始まりました。質実剛健を貫とする修道学園の同窓会に異例とも思える華やいだ雰囲気が漂いました。このダンシングチームは28回の畠山さんが率いる「畠山ダンシングチーム」です。

実行委員長の開会宣言、江崎正行関東支部事務局長の会計報告、林有厚関東支部会長の開会挨拶のあと、来賓の林正夫修道学園理事長、伊藤學人修道学園(中・高)同窓会副会長、浅野長孝浅野家宗家のご挨拶をいただきました。浅野長孝様からは幕末の広島（安芸）藩の立場・主張、新政府の学制の下で主力を新設の広島一中に注がざるを得なくなったところ、修道学園を山田先生が引き受けられ、今日に続いているという貴重なお話を頂きました。

田原俊典校長先生の音頭で乾杯、斎本近畿支部代表幹事、山内教頭先生、土岸教頭先生の来賓紹介のあと、再び畠山ダンシングチームのダンスと、加えて畠山さんと同じく28回の藤賀さんが率いる歌って踊る若い女性５人のユニット（仮名ＣＡＳＳＩＳ）のショー。畠山、藤賀の両氏を筆頭とする28回の感性の鋭さには脱帽です。

景品抽選、みたび畠山ダンシングチームのクロージング・アトラクションののち、今年初め「中東の笛」事件で活躍した日本ハンドボール協会の専務理事、18回の川上憲太さんの音頭で校歌斉唱、「ふれー、ふれー、修道、いいぞ、いいぞ、修道」を唱和した後、野崎幹事長の閉会挨拶でお開きとなりました。

華やかな若くて美しい女性のダンス、歌、は一部の方から遊びが過ぎるぞとお叱りを受けるのではないかと内心ひやひやしていましたが、集いは概ね好評だったと言っていただき実行委員として胸を撫でおろしています。浅野宗家に伝統にまつわるお話をいただいたこと、サッカー部、ハンドボール部初め、各同窓生、各位のご協力をいただいたことの賜物と感謝申し上げる次第です。

支部だより

第14回江能修友会総会

平成20年6月15日（日）　於：広島アンデルセン
胡　子　雅　信（高40回）

平成7年7月7日に発足しました江田島市（江田島・能美島）出身および関わりのある者を会員とする江能修友会も14年目に入りました。このたびは修道学園同窓会より、公私ともご多忙の中、松田弘、中村靖富満　両副会長に出席いただき、広島アンデルセンにて総会および懇親会がおこなわれました。

例年は梶川進先生（旧中29）の漫談で懇親会が大いに盛り上がるのですが、先生が旅行で不在とのことで、急遽、山下江弁護士（高23）にミニ講演をお願いしました。山下弁護士には、これまで関わってこられた事件や昨今の裁判事情、来年5月21日から始まる裁判員制度などをまじえて、ためになる【身近な法学】を講義いただきました。

最後に参加者一同が輪になり肩を組みながら、校歌を歌い、来年の再会を約束しました。

後列左より：丸吉・小西・西田・西平・繁村・平見・宇根
中列左より：下木・大石・西口・空・楠木・佐原・尾上・胡子
前列左より：浜井・北村・中村副会長・松田副会長・久保・山下

同期会報告

米寿の同期会

森信　　毅（旧中30回）

今年我々旧制中学30回卒業生は米寿を迎えるので5月15日に宮島で同期会を開催した。

この日を楽しみにしていた千葉県、山口県からも参加して9名が揃った。

丸本君揮毫の「米寿」の掛け軸を床の間にかけて浴衣に着替えて開宴、アルコールが入ると聴力の低下で次第に声高に話が弾んで、米寿を迎えることが出来たのは、夫々が持って生まれた運命と、いくらか不具合が有っても奥様と支え合って一緒に暮らしている事だろうと思えた。

翌朝神社に参拝し拝殿でお払いを受け、世界平和と米寿を迎えられたお礼と間近な卒寿にも揃って参拝できる様お願いを申し上げた。

顧みれば入学した200名の友も太平洋戦争の開戦により、学生の徴兵猶予の廃止と卒業を6ケ月繰り上げて学業半ばでペンを銃に持ち代え敗色の濃い戦線に出陣して、多くの友人が亡くなった。

同席の久保田君は「対ソ防諜通信」に関わっていた故に、11年の長きに亘り「ソ聯」に抑留され、言語に絶する艱難にも耐え幸運にも復員したが、一番若振りで、明るく健康でこの会のお世話を一緒にしている。

我々の絆は強く、奇数月は見晴らしの良い市内のホテルの炬燵部屋で数名の昼食会を、5月には宮島錦水館での同期会と決めているが、この会の終わる日は知らない。

河野　福原　久保田　高松　丸本　角川　森信　大藤　岡田

同期会報告

卒業以来71年目の同期会

北　川　洸太郎（旧中33回）

昭和17年３月に卒業以来71年目を迎えた我ら〔三三会〕はサクラ咲く平和公園に近い元安橋下の船着場に午前11時15分に集合、デイクルーズ〔川の遊覧船〕にて広島の川面から両岸のサクラを鑑賞することに致しました。昨日の大雨がうそのように上がって青空の下を船は快調に滑って行きます。ただ２、３日来の寒気によってサクラの開花はいま一つ、２～３分咲きのサクラは我々の心を打つところまでは行かなかった。40分の遊覧を終えて一行19名は平和公園で待つ不乗船組の７名と合流して原爆慰霊碑に参拝した後、その前で26名は集合写真を写し近くのホテルサンルート15Ｆイタリア料理〔ヴィアーレ〕に赴き、平和公園とサクラ並木と元安川と原爆ドームの見下ろせる絶景を見ながら食事に舌つつみを打つことになった。

先ず昨年鬼籍に入られた６名を含む今までの物故者103名のご慰霊に対し黙祷を捧げた後、遠路はるばる参加された北海道北広島市の久保井正行君と佐賀県波佐見町の松尾（旧姓古屋敷）君からご挨拶頂きました。お二人とも今でも社会に対し多大なる貢献をしておいでになり我らの誇りであります。（勿論全員がそうであるように。）

続いて山道君による乾杯の後、歓談に入り84歳ながら元気溌剌の26名は大いに青春を懐かしみ、旧師旧友に思いを致し、現在の健康と趣味を語り、有意義な２時間半を過ごすことが出来ました。最後に大島君のハーモニカ演奏に合わせて〔荒城の月〕を歌い、〔ふるさと〕と修道中学校歌を合唱して解散になりました。お互いに健康に留意して、来年の再会を約束して帰途に着きました。

北川　磯谷　竹下（櫻井（千））　森川　大田　中野　城田　久保井　角田　山道　迫田　松尾　俵　大島　宮田　松尾夫人　日域　斉藤　櫻井（伍）　上垣内　西村　友兼

同期会報告

四期会総会報告

河　野　富士雄（高校４回）

「戦塵の未だ消え去らない昭和21年本校入学試験（注：旧制中学校）を実施して276名の合格者を得たので、４月25日終戦後最初の入学式を挙行し…」（修道学園史p276）。われわれの同期生初対面の記録です。学制が変わって昭和24年３月新制修道中学２回生として卒業、引き続き27年３月修道高校４回生として巣立ちました。中学卒業で他校に転じた者七十余名、高校から入学した者それ以上、混乱した時代です。その総てが291名。「紅顔の美少年」も昨今話題の「後期高齢者」となりました。鬼籍にはいった者67名、所在がわからない者44名、という数字が56年の時の流れを感じさせます。　毎年６月の第二土曜日に集まるようになってから36回目、今年は６月14日午後６時からメルパルクHIROSHIMA５階瀬戸の間に、川野観治先生を中心に、恩師よりも頭の薄くなっているもの多数を含む41名が集まり、２時間ばかり歓を尽くしました。明慶寺前住職長坂公一君のありがたーいお説教もありました。真面目に聴いた者は極楽行き間違いなし。

特別企画その１、返信はがきに記してある「近況」を活字にして近況報告集を作り、全員に配付しました。趣味に明け暮れている者、ボランティア活動に生き甲斐を見つけている者、病を克服しようと頑張っている者、…貴重な人生体験集ができあがりました。

特別企画その２、同窓会が協賛している加藤友三郎銅像復元運動に四期会として参加することにして拠金を募り、集まった５万円を「復元会」に寄付しました。

菊田毛利　木下　平見荒木梅田　和田大島大下　行友長坂新田　大巳上野(広)竹中渡辺　三浦合原　阿曾沼門　三吉川野先生　加納　伊藤住本　斎藤　木島河野　中村小野　稲富原田　中能　縫部仙波伴　内藤上野(浄)　重富　火浦土井　山田

同期会報告

修道高五回「高野山・熊野三山と那智・勝浦温泉の旅」に参加して

中　村　陽　一（高校５回）

この度「修道高五回の会」の「高野山・熊野三山と那智・勝浦温泉の旅」の旅行に参加致しました。広島出発組29名・関西組７名。関東組５名・総計41名の多数の参加者があり五回同期生で生涯通信費支払者、生存者会員207名の全会員にご案内致しました。

毎回参加されている方で、如何しても日程が重複して参加出来ない方、透析・血糖値等の健康維持保全の為断念された方、前立線放射線治療等で予定の立たない者、千差万別です。種々の事情で参加出来なくても　その多くは二年に一度の「五回の会」の親睦旅行を楽しみにしており、先般修道同窓会誌に投稿した「五回同期会の道のり」で八十歳になったら解散しようと話したところ「馬鹿なことを言うな」と佐伯正司兄に一括され、皆なまだまだ元気です。同期会には上向井快三兄・佐伯正司兄・渡邉浩其兄・はがきでお馴染みの徳永賢三兄・発送郵便物仕分け作業等に馳せ参じてくれる山﨑經男兄・松村允雄兄・西村勲兄、関西組の真田多美蔵兄・明石敏兄・関東組の嵐渕允嗣兄・本光繁幸兄等多くの方々や、今回参加された41名の方々の情熱と熱く強い思いがあります。是非これからも健康で旅行を継続して行きたいと願っております。

シングルプレイヤーの石田典之兄を囲んでのゴルフ同好会も関西組の参加で益々親睦も深まり、今回の旅行も平成７年の高知還暦旅行より数えて５回目になります。又山根伍兄の「長寿社会奉仕」ボランティア団体で活躍中のザ・キングオブ・デキシーランド等、修道学園同窓会では、我々の「修道高五回の会」は異例の活躍だと思います。恒例の「８月12日の同期会」「12月の忘年会」と継続した親睦会の賜物と確信しています。

青春を共に過ごした同期と語り、残された人生を健康で楽しく、次世代の為に役立つ貴重な人材として、心身共に健全で頑張り、家庭・地域社会での活動の源としても有意義な「修道五回同期旅行」の「こころの旅路」と自負しています。

平成20年４月20日（日）・21日（月）・22日（火）、二泊三日の旅行でした。

《先発広島出発組》は、広島駅新幹線口前１階広場を外に出て左側、グランビアホテル側にデラックス観光バスが待機し、出発は早朝７時30分。朝食弁当を用意しての早速の乾杯をしながらの出発でした。

《関東組・関西組》は新幹線、新大阪中央出口にて関西組の真田多美蔵兄・明石敏兄・山岡誠兄・植田寛明兄・西村文夫兄の各兄が「10時30分～11時」まで待機し、合流して御堂筋線地下鉄にて千里中央まで一緒に移動して、先発広島組と千里中央にて11時30分合流致しました。ＪＲの今回の改定によりのぞみは全線品川・新横浜に止まり便利になりました。

何と言っても健康管理が第一ですが、そうは言っても平素の日常生活では食事管理に十分に気を使っていると思いますが、然しこの旅行期間中はストレスを解消してよい仲間・美味しい酒・食事と十二分に堪能して、帰宅後又節食の努力をすればと思っています。

渡邉浩其兄が会計担当の８月12日の「五回同期会」より20万円の協賛金を頂いておりますので十分満喫した贅沢な楽しい旅行をさせて頂きました。

千里中央より阪和自動車道の岸和田ＳＡでトイレ休憩をとり、泉南にて一般道に入ると鉄砲寺で名高い根来寺で最後のトイレ休憩をとり、高野山まで約１時間トイレ休憩がありませんが、用意している高速瞬間トイレパックがあり気分的に安心でした。

ご承知のように高野山は弘法大師空海が真言宗修禅道場を開いて1200年、標高800mの山頂に117の寺院があり、その歴史的価値は熊野古道を含め世界遺産に登録されており、宿泊した宿坊福智院

は一番設備も新しく、歴史的な古い建物ですが立地も良く唯一の温泉を備え、究極のヘルシーフードの精進料理（勿論般若湯の語源は高野山）、また早朝六時より本堂にて約45分のお勤めに希望者のみでしたが全員参加しての有意義な楽しい第一日でした。

欝蒼とそびえる杉木立の奥の院の参道は歴史上名高い織田信長・明智光秀・武田信玄・上杉謙信等の戦国時代の敵味方の武将の墓碑が、弘法大師の膝元に無言で眠る姿は考え深い風景でした。金剛峰寺では秀吉の甥にあたる秀次が関白職を継いだ二年後、柳の間で28歳の若さで切腹した悲話を伝える広間もあり、高野山門前街道には数々の歴史・建築・文化があふれています。

熊野三山（本宮・速玉・那智）瀞峡と巡り二日目の那智・勝浦の「ホテル浦島」はその規模も大きく狼煙半島全部がホテルの敷地であり、太平洋に面し、打ち寄せる波の音をききながらの望帰洞・玄武洞の温泉は紀州の殿様がここちよさに帰るのを忘れたと言うのも納得でした。

毎秒１ｔの滝が133mの高さから１本の滝になって落ちる「那智の滝」は、それ自体がご神体でありその姿は感動的でした。

白浜では自然の造形の不思議さを見せる千畳敷・三段壁とまた「とれとれ市場」での新鮮な地元の珍味を堪能しての充実した内容でした。「老後を楽しく、次世代の為に役立つ人材として益々健康管理に注意し、元気で楽しく頑張ろう！をモットーに」「修道高五回同期会」は楽しく励みになる活動をとこれからも念じています。

平素の健康管理を維持しながら老後を健康で楽しく、日本も素晴らしいところも数多く、青春を共に過ごした気楽な仲間達で残り少ない人生を楽しみたいと思います。

平成20年６月20日

旅行が楽しく安全で、良き思い出となります様、二年後の再会を念じて！！

高野山　宿坊福智院　平成20年4月22日　修道高五回　同期会

那智の滝　修道五回同期会　平成20年4月22日

白浜千畳敷　太平洋を背にして左側より松村・河迫・三登・蔵田・西村・長濱・中田各兄

同期会報告

韓国訪問の旅

長　野　昌　敏（高校16回　㈱長野MGソリューション代表取締役）

北と対峙する板門店本会議棟

北朝鮮の板門閣（奥）

６月12日から15日にかけて、韓国を訪問しました。参加者は、修道高校16回の15名。東京組からは、マスコミでおなじみの弘中弁護士他４名、広島組は、中野元三井物産中国支社長がつくり、引き継いで私が幹事をしている修楽会のメンバー10名です。

まず、日本のある現地法人社長から韓国経済の現状と今後について、次元の高いレクチャーを受けました。「ロシア、中国、韓国、日本のタテのエリアでそれぞれが強みを生かして連携して行く必要がある」「港湾、空港等国際競争力を高める拠点開発は、ある程度の強制力が必要」等のお話は考えさせられるものがありました。海外に進出している、あるいはこれから進出しようとする社長には参考になったのではと思います。

次に、同期の重家君が日本大使になっているため、激励をかねて交流し懇親を深めました。先の現地法人社長によると、韓国で好評とのことで、フランクで人柄の良い大使であればこそと嬉しく思いました。

今回の訪問で刺激的だったのは、板門店訪問です。板門店という地名は、朝鮮戦争当時UN軍と共産軍との休戦会談に由来します。当時こちらには居酒屋を含む4件の藁葺きの家がありました。そこから板門店と呼ばれるようになったとのこと。1953年停戦協定が締結されてから公式にUN軍と共産軍が共同管理する共同警備区域と呼ばれ、韓国と北朝鮮の行政区域に入らない独特な場所となっています。

板門店の会議場の中に入りました。軍事分界線上の会議所建物は７棟で、このうち青色の３棟はUN軍が管理、このうち本会議場は解放されていて、北と南が会う唯一の場所となっています。目を合わせないようにするためのサングラスをかけた兵士が、いつでも発砲できる不動の体勢で警備する中,本会議場に入り、一応北朝鮮側に足を踏み入れてきました。50メーター先には北朝鮮兵士がおり「指差すな」「走るな」等の注意をしつこく受ける中、緊張感を持って会議場や北朝鮮の板門閣、観測所を見ることができました。

その後、北朝鮮兵士が斧でUN軍兵士を殺した場所、外国記者が亡命しようとして走ったことから銃

撃戦になり、死者が出た現場、捕虜交換で橋を渡って帰ってきた「帰らざる橋」等の現場を視察し帰ってきました。殺されても責任は取れない、あくまで自己責任という宣誓書に署名したときは、さすがに緊張しました。

今回の体験で、「感情をダイレクトに表現する」「人の序列を付けたがる（年齢、大学名）」韓国人と「空気を読む、本音建前を使い分けることを重要とする」日本人との違い、また戦争の膨大な無駄と数多くの悲劇などが皮膚感覚でつかめました。ジャパニーズソフトによる平和への貢献がますます必要だと思いました。

先月私が特別会員になっている中国地区品質経営協会のシンポジュームでも、日本の経営者は文化を語らないと外国の経営者からいわれていることが話題となっていましたが、まず日本文化を理解できるようにしていきたいものです。

特別寄稿

山田養吉先生の「丙寅日記」を読む（その一）

（慶応二年六月朔～慶応二年六月十五日）

修道学園史研究会　畠　　眞實（高校７回）

この日記の表紙に「十竹軒日記　慶応丙寅」と書かれている。さらに次のページに「丙寅日記　下　慶応二年　自　六月　　至　十二月　終」（慶応二年：1866年）と記されている。しかし、「丙寅日記」下は六月一日から八月十六日までの記述しかなく、それ以降のページは一冊にまとめられてはいるが、日記が記されている用紙も異なり、最初のページにはいきなり「八日　晴」と書かれている。ページをめくっていくと、「丁未　七月朔　雨」という記述がある。「丁未」というのは、明治40年（1907）、遡れば弘化４年（1847）にあたる。山田養吉先生は明治34年（1901）に亡くなられているので、「丁未」が明治40年のことではない。弘化４年(1847)ならば、先生15歳である。翌年嘉永元年(1848) 16歳で句読師に抜擢されておられる。普通に考えれば、15歳ころの日記の一部がここに併せられているということになるが、どのような経緯でここに採録されているのか、全く判らない。

これまで紹介した先生の日記は、最初「乙丑日記」（元治二年・慶応元年[1865]）の抜粋、次ぎに「十竹軒日録」（慶応４年・明治元年８月１日～明治４年９月14日）のうち、明治４年８月４日から８月20日過ぎまで。主として旧藩主引き留め運動に端を発した所謂武一騒動に関わる箇所である。

「丙寅日記」は年代的には「乙丑日記」に次ぐもので、現在保管されている日記の中では、二番目に古い。先に述べた如く、日記としては短い期間の記述であるが、第二次長州戦争における主として「安芸口の戰」に関して中心的な部分について書かれているので興味深いものと思われる。

参考

この日記には第二次長州戦争に関わる記述がかなりある。慶応２年（1866）６月に至るまでの経緯をあらまし記しておく。

・1864（元治元年）

７月　蛤御門の変（禁門の変）

８月　長州征伐

11月14日　長州謝罪　長州藩三家老の首級、広島国泰寺に到着　尾張藩家老成瀬

隼正首実検

18日　防長への進撃は無期限中止の命令

19日　吉川経幹を召還し、次の三点を命じる

1．毛利敬親自身の謝罪書の提出

2．山口滞在の五卿（七卿落ちのうち）を他藩へ移すこと

3．山口城の破壊

11月22日　草津・古江に出動していた広島藩兵を撤兵

・1865（慶応元年）

1月4日　総督徳川慶勝広島を離れる

幕府は毛利父子、五卿の江戸召喚に固執した。大目付、目付などに江戸護送を命じた。

毛利父子と親戚である大洲・龍野・宇和島の三藩主や広島藩に斡旋するように指令したが、各藩はいずれも困難であると上申した。

・長州藩の事情一変

元治元年(1864)12月、高杉晋作が保守派打倒の烽火をあげて下関に挙した。2カ月にわたる内戦を経て、藩政は急進派が掌握。「武備恭順」を藩是とした。

このような情勢をみて、幕府は毛利父子の召喚は至難と判断し、将軍親征を決す。慶応元年(1865) 4月、前尾張藩主徳川茂徳（もちなが）[のち、和歌山藩主徳川茂承（もちつぐ）にかわる。] を征長先鋒総督とし、彦根藩などに出兵を命じる。将軍進発の日を5月15日と決定。

この後、約一年間にわたり、征長をめぐる幕府と長州との交渉、かけひきが展開される。

・慶応2年（1866）1月　将軍家茂（いえもち）勅許を得て、次の長州処分を決定

1．10万石の削封　2．毛利敬親父子の蟄居　3．三家老の家名断絶　4．激徒首領の拘引

老中小笠原長行（ながみち）を広島に派遣して長州藩側に処分を伝達し、長州処分を終了しようとした。

・4月幕府長州再征を決定

一方長州藩は

慶応元年(1865)、5，6月頃、長州は土佐の坂本龍馬らの斡旋で薩摩藩と接触。同藩を仲介として、小銃・汽船の購入。ミニエール銃4000挺　ゲベール銃3000挺が薩摩藩の汽船で三田尻に運ばれた。新鋭軍器の供給で軍事力確立の基礎ができた。

慶応2年1月　薩長攻守同盟締結　薩摩長州再征への出兵拒否

・広島藩開戦阻止のため長州への寛大な処置実施の周旋に奔走

（以上「広島県史」による。）

・5月10日　小笠原閣老より広島藩執政辻将曹に謹慎が命じられた。辻が閣老の意に反して上阪したことに拠るものだとの評であった。

・5月14日　小笠原閣老より防長へ裁許状を申し渡して以来、両国の民は動揺しているようなので、速やかに国境まで芸藩先手の軍兵を繰り出せとの命令が出された。この時、藩士数百名が藩の学問所で会合して、幕府の近状は国家の大計は捨てて顧みられず、ただ権威をもって諸藩を服従させようとしている。建議に対しても耳を傾けない。執政野村帯刀を遣わして長州再征の非を説いたが、聞き入れることなく、さらに執政辻将曹を上阪させ、板倉閣老に長州再征は不可なるとの建白書を提出したけれども、閣老は避けて会おうともせず、之を却下し、誠意のかけらもみせない。ついに野村、辻の両執政を幽囚させるに至った。ここに至ってはわれらの我慢もなんの役にも立たない。藩主父子のために各自がなすところを為さないではおれない。或いはまた小笠原の陣営を焼き払い、広島を退去させようと論じているものである。或いは速やかに長防と話をして京都にお出ましになっている閣下に申し上げよう。途中邪魔だてする者は打ち払い、京師に上るがよいと論じる者がいる。このような内容を記した建白書を藩主に差し出す。

・5月15日　藩主の世子淺野長勲公は藩士一同を城中に召集して、行動の激化することを抑さえる。小笠原閣老は密かにこのことを聞き、恐れをなす。

・5月17日　野村帯刀の謹慎を解く。

・5月18日　長州家老と三末家より、宍戸備後助・小田村素太郎が拘執されという知らせに藩内が動揺しているので、藝州藩に依頼して両人を放還して欲しいと幕府に願う。

・5月19日　小笠原閣老はこれを斥ける。その願い書を長州に返却する。

毛利大膳父子への裁許を仰せわたされた請書の提出期限（5月20日）について、吉川監物（経幹）より、国内人心動揺し、あれやこれやと苦心が極に達しているので、来たる29日まで延期されるようにと、藝州藩に頼んでくる。

そこで藝州藩はその歎願書を小笠原閣老に提出する。

・5月20日　小笠原閣老はその事情を斟酌して藝州藩を介して延期許可の旨を監物に通達させる。29日まで延期。請書を差し出さない時は速やかに問罪の師を派遣し、6月5日をもって討ち入りすべき旨を藝州藩に達せられた。

・5月28日　征長先鋒副総督閣老松平伯者守宗秀（丹後宮津侯）大阪より軍艦で広島に到着。城郭内淺野守之進の邸に宿陣。

・5月29日　安芸守淺野長訓より長防討伐のことについて、重ねて「長州の哀訴歎願は士民の為す所にして、大膳父子は恭順謹慎中なれば、御裁許の趣意、父子に達せざるが故に、更に説諭の必要あり」と小笠原閣老に建言されたところ、6月3日同閣老より「半途にて支える者あらば、それ亦裁許を拒む者なり、問罪の師を差向くるは之を誅殺するの旨なり。」と指令された。

（以上「広島市史より）

六月朔　晴

朝桔髪　上学如例　午後会于学校　有故会止　乃上書而已　其意略　如前日所上之書意　未牌前帰　仮眠　写字　申牌至于松本氏

注

・上書　意見を述べるために主君・上官などに書状を奉ること。またその書状。

書き下し

朝結髪す。上学例の如し。午後学校に会す。故有りて会止む。乃ち上書すのみ。其の意略す。上書する所の意前日の如し。未牌前帰る。仮眠。字を写す。申牌松本氏に至る。

口語訳

朝髪を結う。学校へはいつものとおり行く。午後学校で会合がある予定であつたが、訳あって会は中止。そこで上書だけであった。その（上書）の趣意は省略する。前日建白した書状の趣意と同じようである。午後2時ごろ仮眠した。字を写す。午後4時頃松本氏のもとに行く。

二日　雨

朝早出自松本氏　直上学　撃漢楚軍談帰　蓋松本氏之書　巳牌帰　又至于三宅氏　午眠　写字　夜亦然　風雨晦冥紙窓粛然　如敵兵将来襲者遠　如聞鼓声　或如聞放砲之声　沈思細思歎身之当今時不能建寸功　巳牌閣老小笠原壱岐守赴于豊前小倉　伯耆守留于此　茲夜幕解辻太夫幽閉　其命之意如所命于野村太夫之意

注

・撃　ひっさげる。・晦　暗い。・冥　くらやみ。・紙窓　明り　障子をはめた窓。・細思　こまかく考えること。・小笠原壱岐守　老中小笠原長行（ながみち）・伯耆守　本荘（松平）宗秀。丹後宮津藩主。慶応2年5月28日、小笠原壱岐守にかわり、征長総督紀州藩主徳川茂承（もちつぐ）を補佐するため、広島に入る。・辻太夫　辻維岳（1823～1894）将曹。広島藩執政。維新の功臣。第二次長州戦争で広島藩は中立政策をとり、幕府へ長州征伐は不可なことを説いたが、用いられず、出兵を拒否し、広島滞陣中の老中小笠原長行から、野村帯刀とともに謹慎を命じられた。（「三百藩家臣人名辞典」）・野村太夫　野村帯刀(たてわき)　・閣老小笠原壱岐守其命之意如所命于野村太夫　前述の辻維岳の項の説明を参照。

書き下し

朝早く松本氏より出づ。直ちに上学す。漢楚軍談を撃して帰る。蓋し松本氏の書なり。巳牌帰る。又三宅氏に至る。午眠。字を写す。夜亦然り。風雨晦冥にして紙窓粛然たり。敵兵将に来襲せんとす

る者の如し。遠く鼓声を聞くが如く、或は放砲の声わ聞くが如し。沈思・細思・歎身の当今、時に寸功を建つ能はず。巳牌、閣老小笠原壱岐守豊前小倉に赴く。伯耆守此に留まる。茲の夜、幕辻太夫の幽閉を解く。其の命の意、野村太夫に命ずる所の意の如し。

口語訳

朝早く松本氏のところを出て、直ちに学校に行く。漢楚軍談を挈（ひっさ）げて帰る。つまり、これは松本氏の書籍である。午前10時頃、また三宅氏に行く。午眠。字を写す。夜もまた同じ事をする。風雨が辺りを暗くし、明障子をはめた窓が物静かである。敵の兵がまるで来襲するような様子である。遠くで太鼓の音を聞くようであり、或いは発砲の声を聞くようでもある。沈黙、細思、歎身のこのごろ、時に小さな功績を建てることもできない。午前10時頃、閣老小笠原壱岐守が豊前小倉に赴任する。伯耆守はここ（広島藩）に留まる。この夜、幕閣が辻太夫の幽閉を解除する。その命令の意味は野村太夫に命じたと同じ趣意である。

参考

閣老小笠原壱岐守長行は長防征討軍九州路指揮のため軍艦で豊前小倉に出発。

三日　雨

朝如例　午眠　群童来驚眠　蓋求甲乙于集書札也　赴于安部氏　黄昏帰　尽日雨甚而潦水漲于路深至于膝　帰而脱袴乎否山下君立談　良久而去夜早臥　幕未答念九日所上之書　吾又続上書　曰

御名先鋒先手人数佐伯郡小方迄繰出候義者　璽命御届申上候通ニ御座候処　其後御名より申上置候趣も有之　何分之御示諭可被爲在之奉待候処　追々切迫境筋不安之懸念御座候間　残之人数明四日より夫々国境迄繰出シ常々防長敵境へ討入候義ハ難相運奉存候間　右書面之趣得斗御勘弁被成候早々御示諭御座候様仕度　此段御届旁申上候以上

御名内

久保田平司

茲書上伯州公時遇于批於念九日所上之書而下　其批曰　将討長之士民　塞于路而不達　台命于大膳父子者也云　故上茲書則曰是亦与前書之意同耳既答于前書則是書不答　亦可即還茲書

注

・尽日　一日中　・潦　ながあめ　・批　君子や上司が臣下から提出された文書を見て、よしあしを決める。またその判定された文句。・立談　たちばなし　・念九日　「念」二十のこと。二十九日。・璽命　天皇の命令　・台命　朝廷の命令。

書き下し

朝例の如し。午眠。群童来たりて眠を驚かす。蓋し書札を集めたるに甲乙を求むるなり。安部氏に赴く。黄昏帰る。尽日雨甚だしくて潦水路に漲る。深きこと膝に至る。帰りて袴を脱ぐや否や山下君立談す。しばらくして去る。夜早く臥す。幕、未だ念九日に上する所の書に答へず。吾又上書に続けて曰く

御名　先鋒先手人数佐伯郡小方迄繰出し候義は、璽命御届申上げ候通に御座候処、其の後御名より申上げ置き候趣も之有り、何分の御示諭在らせられべくと待ち奉り候処、追々境筋切迫に及び、不安の懸念御座候間、残りの人数、明四日より夫々国境迄繰出し、常々防長敵境へ討入候義は難相運び難く存じ奉り候間、右書面の趣とくと御勘弁(熟慮すること)成られ候、早々御示諭御座候様仕り度く、此段御届旁申上候。　以上

御名（安芸守　浅野長訓）内

久保田平司

茲の書伯州公に上する時、念九日に上する所の書、批に遇ひて下す。其の批曰く　将に長の士を討たんとするに、民路を塞ぎて達せず。台、大膳父子に命じる者なり、と云ふ。故に茲の書を上すれば、則ち曰く、是れ亦前書の意と同じきのみ。既前書に答ふれば、則ち是の書答へず。亦即ち茲の書還すべし。

口語訳

朝はいつものとおり。午眠。群れをなしたこどもたちがやって来て眠りを覚ます。思うに、書札を集めたものにいずれがいいか甲乙をつけて欲しいといものである。安部氏の許に行く。夕暮れ帰る。終日雨

がひどくて路上に水が溢れている。その水の深さは膝あたりまでだ。帰って袴を脱ぐやいなや、山下君が立ち話しをする。しばらくして帰って行った。夜は早く床に臥す。閣老は未だに二十九日に差し出した書状に答えていない。わたしは、また上書に続けて言うことに、

御名(安芸守　浅野長訓)以下の内容の概略

この書を伯州公に奉る時に二十九日に差し出した書状に批が加えられて下された。その批に言われていることは、まさに長州の士を討伐しようとすると民衆が路を塞いで果たせない。幕府が大膳父子に命じるものである、と言う。それ故、この建白書を差し出せば、言うなれば先の建白書の趣意と同じものにすぎないのである。すでに先の建白書に答えているので、これには答えない。またそこでこの建白書を返すのが適当である。

参考

・久保田平司　広島町奉行

上書の概要　安芸守よりいろいろと申し上げてきたが、なにの回答もなさらない。長州との国境あたりはしだいに不安が募ってきている。藝州先鋒隊のほか、藩兵を明日以降西の国境まで守備のため派遣するが、先鋒として敵境に討ち入ることは辞退する。(「広島市史」による)

四日　晴

朝例如　自今日吾先鋒之兵以次而出　青山公之駕亦将出于不日　是以皆疑朝廷之議論　或至于巳牌　吾君竊使堀先生示昨所出于閣老之書之于吾輩　是以一旦疑解　然皆以爲不戦之先鋒一人不出　亦可出之　或疑朝廷之議論少挫折　未牌前赴郡府　帰路過于木原氏　帰而復過木原氏与先生談　時大砲二三声　人大叫而走　驚出登于前塘見之則煙焔漲天燃于城楼増■驚于此　即疾馳帰著火装赴上月氏与諸子共助出器械什物　時火方熾而如将移于西川氏深町氏者　人争拒之　是以遂無災于二家　茲日辰牌先鋒之兵聚于城中　至未牌猶未出而復有災是以城中雑遝極而申牌後有命　終止而不出　余方過永田氏与主人談話　良久主人曰　今日先鋒之兵　将止而不出　青山公之駕亦将止　然不知其故云　茲日松原演武場試大砲　前所謂二三砲声　則是耳　夜与松斎兄至于氏之臣湯浅介蔵者共談　子牌帰

注

・先鋒　部隊の先頭に立つもの。・青山公　浅野長訓。始め、青山内証分家第五代となり、後に藝州藩主家第十三代を継ぐ。・塘　堤　・燃于城楼

広島城第三郭の二重櫓焼失。「天幕等軍用器具を収蔵せし所にして已に本日第二陣原新五兵衛の一小隊小方村へ出張するに依り同櫓収蔵の軍用器具を支給するが爲め昨宵は軍夫の屡々出入りせしを以て或は火気の遺留するありて発火せし所なるべし。」(「芸藩志」)

・雑遝　多くの人で混み合うこと。また、ひとごみ。

書き下し

朝例の如し。今日より吾が先鋒の兵、次ぎを以てして出でて青山公の駕亦将に日ならずして出でんとす。それで皆朝廷の議論を疑ふ。或は巳牌に至り、吾が君、竊(ひそかに)に堀先生をして、昨、閣老に出す所の書を吾輩に示さしむ。是を以て一旦疑、解く。然るに皆以爲(おもえ)らく、不戦の先鋒一人も出でず、亦之を出すべし、と。或は朝廷の議論少しく挫折するを疑ふ。未牌前、郡府に赴く。帰路木原氏に過(たちよ)る。帰りて復た木原氏に過(たちよ)り、先生と談ず時に、大砲二、三声。人大いに叫びて走る。驚き出で、前塘に登り、之を見れば、則ち煙焔天に漲る。城楼に燃ゆ。大■此に驚く。即ち疾馳して帰着す。火装し、上月氏に赴く。諸子と共に器械・什物を助出す。時に火、方に熾(さかん)ならんとして将に西川氏・深町氏なる者に移らんとす。人、争ひて之を拒(ふせ)ぐ。是を以て遂に災二家に無し。茲の日辰牌先鋒の兵城中に聚(あつま)る。未牌に至り、猶ほ未だ出でずして復(ま)た災有り。是を以て城中雑遝極まりて、申牌後先鋒の兵に命(めい)有り。終に止めて出でず。余、将に永田氏に過(たちよ)らんとす。主人と談話す。しばらくして主人曰く、今日先鋒の兵、将に止めんとして出でず。青山公の駕も亦将に止めんとす。然るに其の故を知らず。茲の日松原演武場大砲を試む。前(さき)に二、三の砲声と謂ふ所、則ち是のみ。夜、松斎兄と氏の臣湯浅介蔵なる者に到り、

共に談ず。子牌帰る。

口語訳

朝はいつものとおり。今日、わが藩の先鋒の兵は第二次をもって出動す。青山公の駕もまた日を置くことなく出ようとしている。このことで、人々は朝廷における議論がどうのようになっているのかを不審に思う。午後２時頃、わが君がひそかに堀先生に命じて昨日閣老に差し出した書をわたしに見せるようにされた。このことで、一旦は疑問が解けた。それなのに人々が思うには、不戦の先鋒が一人も出動しない、先鋒を出動するべきである、と。或は朝廷の議論が少し挫折したのではないかと疑う。午後２時前、郡役所に赴く。帰路木原氏に立ち寄る。帰って、また木原氏に立ち寄り、先生と話をしている時に、大砲が二、三声した。人々が大いに叫びて走る。驚いて外に出で、前の塘（つつみ）に登り、これを見れば、煙焔が天に一杯にひろがって城楼で燃えている。大■此に驚く。すぐに疾走して帰る。火事の服装をし、上月氏のところに駆けつける。みんなとともに器械・什物を運び出す。時に火は、まさに熾（さかん）なろうとして今にも西川氏・深町氏の家に移ろうとしている。人々は争うようにして、火勢を拒（ふせ）ぐ。そうして遂に火災が二家にはおよばなかった。この日午前８時頃、先鋒の兵が城中に聚合する。午後２時ごろになってもやはり出動しないままで、また火災がある。そのため城中は雑逐が極まって、午後４時すぎ、先鋒の兵に命令が有る。終に兵を止めて出動せず。わたしは、永田氏に立ち寄ろうとしていた。主人と談話する。しばらくして主人が言うことには、今日、先鋒の兵は出陣を止めんとして出動しない。青山公の駕も亦止めようとしている。しかし、その理由は知ない。この日松原演武場大砲で発砲の演習を試みる。先に二、三の砲声と言ったのはまさにこれに違いない。夜、松斎兄と氏の家臣湯浅介蔵という者のところに行き、共に談話する。午前０時頃帰る。

参考

・この日、安芸守は再び幕府の征長は大義名分がなく、実施してはならないと松平閣老に建言する。これについては、６月10日に記されている。

五日　晴与雨

朝将作贈大兄之書而有客妨　終不能草　午睡　松斎兄来　共赴頼氏　到則一人亦未至　乃復共去于中島　拝紀州公之来儀　衛頗厳　時方急雨　公独載長柄傘　餘皆悉湿　申牌前将帰則妨于　乃借雨傘復共赴頼氏則人復未至　尋之則曰先生朝去而未帰　先時北村子未是亦去　餘皆不至　爾則不得止共帰　夜贈大兄之書成　近頃有大垣戸田式部（肥後）守者能以写真鏡写名区勝景　無不知意而至厳島則敢不可写人　皆感其霊妙　是以戦士戊卒無不祈勝　自前日家大人頗不快

注

・書　手紙　・来儀　人がくることの敬語。紀州公紀州藩主徳川茂承（もちつぐ）征長総督　・頼氏　頼■軒のことか。・名区　名所・戊卒　国境を守る兵卒　・家大人　家長

書き下し

朝、将に大兄に贈るの書を作らんとして、客の妨げ有り。終に草する能はず。午睡。松斎兄来たる。共に頼氏に赴く。到れば則ち一人も亦未だ至らず。乃ち復た共に中島に去（ゆ）く。紀州公の来儀を拝す。衛、頗る厳し。時に方（まさ）に急に雨せんとす。公独り長柄傘を戴き、餘は皆悉く湿す。申牌前、将に帰らんとすれば、則ち雨に妨げらる。乃ち雨傘を借り、復た共に頼氏に赴けば、則ち人復た未だ至らず。之を尋ぬれば、則ち曰く、先生朝去（ゆ）きて未だ帰らず。先の時、北村子未だ是亦去らず。餘はみな至らず、と云ふのみ。則ち止むを得ず共に帰る。夜、大兄の書成るを贈る。近頃大垣戸田式部（肥後）守なる者、写真鏡を以て名区・勝景を写す。意の如くならざる無くして厳島に至れば、則ち敢へて人を写すべからず。皆其の霊妙を感ず。是を以て戦士・戊卒勝を祈らざる無し。前日より家大人体頗る不快なり。

口語訳

朝、大兄に贈る手紙を書こうとしていると、客があって妨げられた。終に起草することができなかった。午睡。松斎兄がやって来た。一緒に頼氏のところに行く。行ってみると、一人も来ていない。そこでまたいっしょに中島に行く。紀州公のおいでを拝見し

た。護衛がたいへんに厳しい。時に急に雨が降ろうとする。公だけが長柄の傘にのり、他の者はみな悉く濡れている。午後4時、帰ろうとすると雨に妨げられる。そこで雨傘を借り、また一緒に頼氏の許に行く。人はまた未だ来ていない。どうしたのかと尋ねると、頼先生は朝出かけてまだ帰られない。先の時、北村さんはこれまた、まだ行ってはいない。その他はみんなやって来ていない、と言うだけである。したがってやむを得ず、共に帰る。夜、大兄への手紙を書き終えたので贈る。近頃、大垣戸田式部(肥後)守という人が写真鏡で名所や景勝を上手に写す。思うようにならないということが無くて厳島に着くと、しいて人物を写すことをしない。人々はその何ともすばらしい技に感動する。そこで戦士・兵卒勝運を祈らない者はいない。前日より家大人体調がひどくよくない。

参考

・征長軍先鋒総督紀伊中納言徳川家承(いえつぐ)広島に着陣する。紀州家老(新宮城主)水野大炊頭(おおいのかみ)も着宿する。(「広島市史」)

六日　晴与雨

朝結髪　上学　茲日伯耆公登城　凡閣老之来于国也　以吾君到謁于彼而後彼登城爲例　此間吾君未謁于伯州公　而聞今日伯州公将登城辞以例　伯州公不聴　終登云其所以来　不可知為何事　茲日贈大兄書　午眠　写字　夜赴松本氏　亥牌帰

注

伯州公　宮津藩主本荘(松平)宗秀。征長副総督。

書き下し

朝結髪す。上学。茲の日伯耆公登城す。凡、閣老の国に来たるや吾が君の至るを以て彼に謁して後、彼登城するが例と為る。此の間、未だ伯州公に謁せず。而るに今日伯州公将に登城せんとすを聞く。例を以て辞す。伯州公聴かず。終に登り、其の来たる所以を云ふ。何事を為すか知るべからず。茲の日大兄に書を贈る。午眠。字を写す。夜松本氏に赴く。亥牌帰る。

口語訳

朝髪を結う。上学。この日伯耆公が登城する。だいたい閣老が当藩に来たる時には、わが主君が出かけて閣老に謁見して、その後閣老が登城するのが恒例となっている。そうしたところ、吾が主君がまだ伯耆公に謁見していなのに、今日伯耆公が登城しようとされるのを前例をもって断られたと聞いている。しかし、伯耆公は聴きいれない。終に登城し、やって来た理由を述べる。何事をしようと思われるのか知ることができない。この日大兄に書を贈る。午眠。字を写す。夜、松本氏に赴く。午後10頃帰る。

参考

日記の中で、伯耆公の登城が前例にないことと記されている。「村上家乗」によるとそのことを「珍事なり」と記している。

「六日(中略)閣老宮津侯(伯耆公)、今日御城へ御出で成られ、若殿様(浅野長勲公)へ御咄し会い成られ候義、之有り候由、全体御用向なれば、御旅館へお呼立成るべき筈に考へられ候へども閣老の方より押して御出成られ候と申すは珍事なり。」(「村上家乗」広島藩家老の東城淺野家に仕えた村上家の第四代、第六代、第七代が三代にわたって書き残した日記。これらは個人的な日記というより、家の記録、一家の歴史という性格を色濃く有している。[「村上家乗」の解題による]

・「閣老松平伯耆守は軍事協議の爲登城す。」(「芸藩志」)

七日　晴雨相半

朝如例　午睡　与松斎兄赴頼氏　聴河野翁講太史公報任少卿書　夜子牌臥　此間立野君拉幕吏赴于長州　蓋幕命于吾曰　官将起問罪師請達之長　云　吾辞曰　問罪之師吾之所不屑　不能敢供命　請官遣人告之　然官遣人之無由　則吾使人爲其間耳　乃幕復請吾之爲之間　是以使立野君拉幕吏而赴去

注

・問罪の師　罪を問い質すために遣わされる軍隊、征伐の軍隊。・不屑　潔しとしない。気持ちよくやる気がしない。

書き下し

朝例の如し。午睡。松斎兄と頼氏に赴く。河野翁、太史公の少卿に報任ずるの書を講ずるを聴く。夜子牌臥す。此の間、立野幕吏を拉して長州に赴く。蓋し幕吾に命じて曰く、官将に問罪の師を起こさんとす。之を長に達せんことを請ふ、と云ふ。吾辞して曰く、問罪の師吾の屑（いさぎよ）しとせざる所、敢へて命に供する能はず。官に請ふに、人を遣はし之を告せよ、と。然るに官人を遣はすの由無ければ、則ち吾人をして其の間を爲さしむのみ。乃ち幕復た吾の之の間為すを請ふ。是を以て立野君をして幕吏を拉して赴去せしむ。

口語訳

朝はいつものとおり。午睡。松斎兄と共に頼氏のところに赴く。河野翁が太史公の少卿に報任するという書の講義を聴く。夜午前０時頃、就寝。このごろ、立野君が幕吏を連れて防州に出張する。そもそも幕閣がわたしに命令して言うには、官府は問罪の師を立ち上げようとしている。どうかこのことを長州に伝えて欲しい。わたしはこれを辞退して言うことに、問罪のついて、わたしはこのことをよしとはしない。命令に従うことはできない、と。官府にお願いする。人を遣わしてこのことを告げさせなさい。しかし、官府は人を派遣しようにもその手だてがないので、わたしがだれかにその間のところをさせるしかない。そこで幕老はまたわたしに、このところをなんとかするように要請する。そこで立野君にお願いして幕吏をつれて行ってもらう。

八日　雨

朝如例　帰路過堠楼下　午睡　中尾生来　以贈大兄之書託余且曰　愚弟実爲尊敬兄所愛　僕不堪雀躍　前日長尾完二者赴江都　僕託之以愚弟之事　然是爲後日之地而已　願尊兄之不改于今日而終使愚弟学漢文　固僕之所願也　茲書雖已詳言之恐僕之筆不如意而意不達也　請兄亦朶雲之便告尊兄以茲書　申牌赴西寺街拝祖父某叔父某及浅児墓帰　夜読漢楚軍談便萱堂聴之　茲日幕有命免先鋒及青山公之先鋒

注

・堠楼　物見台　・雀躍　スズメが躍るようにこおどりして喜ぶこと　・江都　江戸の異称　・朶雲（じうん）　他人から来た手紙の敬称　・浅児　未詳

書き下し

朝例の如し。帰路堠楼下を過ぐ。午睡。中尾生来たる。大兄に贈るの書を以て余に託して曰く、愚弟実に尊兄の愛する所と為る。僕雀躍に堪えず。前日長尾完二なる者、江都に赴く。僕之に託すに愚弟の事を以てす。然るに是れ後日の地と為るのみ。尊兄の今日を改めずして終に愚弟をして漢文を学ばしむるを願ふ。固(もとよ)り僕の願ふ所なり。茲の書既に詳しく是れを云ふと雖も僕の筆意の如くならずして意達せざるを恐る。兄に亦朶雲の便を請ふ。尊兄に告ぐるに茲の意を以てせよ。申牌西寺街に赴く。祖父某、叔父某、及び浅児の墓を拝して帰る。夜、漢楚軍談を読めば、便ち萱堂之を聴く。茲の日幕命有り。先鋒及び青山公の先鋒を免ず。

口語訳

朝はいつものとおり。帰り道、堠楼下を過ぎる。午睡。中尾生がやって来た。大兄に贈る手紙をわたしに託し、そのうえ言うには、わたしの愚弟は誠にあなたの尊兄にかわいがられている。わたしは喜びにたえない。前日長尾完二という人が江戸に行かれた。わたしはこの人に愚弟のことをお願いした。しかし、これは後日赴く土地である。尊兄にお願いすることは、他日ではなく、今日に終に愚弟に漢文を学ぶようにさせてくださいということだ。もとよりこれはわたしの願うことである。この手紙はすでに詳しくこのことを言っているのではあるが、わたしの筆が思うように運ばないで、自分思いが伝わらないのではと心配する。あなたにまた手紙の使いをお願いするのであるが、尊兄にはこの思いを告げて欲しい。午後４時、西寺町に行き、祖父某、叔父某及び浅児の墓に参る。夜、間楚軍談を読めば、すぐに母上がこれを聴かれる。この日、閣老が先鋒及び青山公の先鋒を解除する命令を出す。

参考

・幕府は広島藩の征長先鋒を解き藩境等の守衛を令す（「芸藩志」）

九日　雨

朝早起　赴丸山氏　上学　午眠　以浅児之初祭一

日招浮屠師及丸山翁饗之

注

・浮屠師　僧侶　・初祭　一周忌の記念祭のことか。

書き下し

朝早く起く。丸山氏に赴く。上学。午眠。浅児の初祭を以て、一日浮屠師及び丸山翁等を招き、之を饗す。

口語訳

朝早く起きる。丸山氏のところに行く。上学。浅児の初祭なので、この日僧侶と丸山翁を招き、饗応する。

十日　雨

朝早起　結髪　欲赴浄専寺設浅児之初祭　雨甚簑傘路赴服部氏　不幸翁不在家　転赴郡獄府翁未在　乃託言于官隷而去　過堠楼下涯屠者之爲医者小泉権太左衛門者之舟不幸権太帰于家不在舟　蓋欲使視家大人之疾也　又欲渡津而赴西浮屠街　不幸水漲而不出渡船　乃き曲路于中島而去　赴浄専寺　作州之兵屯于是　雑遝極祭終而後与無涯師閑話　良久而帰　午牌片田姪来　質問日本外史　黄昏与沓内生赴山下氏　帰路赴梅園氏　夜亥牌帰　茲日服部翁来曰　長防二州海岸戦方盛　各所来報曰細川氏之兵入于下関　幕兵入于大島郡　且備前以西多海賊白昼掠物

注

浄専寺　峯龍山と号し、一に「上の坊」と称す。寺町光福寺の南隣にある。(「広島市史社寺誌」)・郡獄府　郡の獄庁　・官隷　役人　・堠楼　ものみだい　屠者　牛馬を殺すこと。ここでの意味未詳。・西浮屠街　西寺町　・曲路　まわりみち　・雑遝　多くの人でこみあうこと、人ごみ。・片田姪　山田養吉の弟、片田春太の娘か。・梅園氏　梅園介庵(1816～1888)広島藩校教官。経学・皇典を偏め、武技に通じる。・細川氏之兵入于下関小倉口一番手、肥後藩細川越中守の率いる軍隊が下関に進出。・幕兵入于大島郡　七日厳島宿陣中の幕兵一部隊、軍艦三艘に乗り組み、防州大島に向けて出発す。八日、幕府富士丸・翔鶴丸・八重丸は進んで防州大島郡の多賀浦を砲撃す。(「広島市史」)

云　吾　君之得四日所上幕之書　曰

長防御討伐ニ付心付申出仕置候書付へ御書取を以御通達之趣承知仕候　重而菟ヤ角申上候様御聞取被下候ては奉恐入候得共実以皇国之御大事ニ付右をも不顧赤心無包蔵申出仕候

抑吉川監物より期限御猶予相願格別以御聞届と相成　夫々帰邑仕候　上者　大膳父子へ達命難出来義ハ無之筈又其上ニも半途ニ而相支ニ而相之実其者即御裁許相拒候ものニ付　右の輩を御誅伐被成候　御旨趣云者も相伺御事柄之義ニ付尚熟考仕候処右御書取之趣ニ而ハ第一大膳父子へ達命仕候哉否之義并半途而相支候哉之分堺不明瞭而已ならず　硬命輩御誅鋤之御趣意ニ而も百万之士民中誰硬命誰不硬命申見分ケも難付何を標的として討伐可仕哉ニ兼而申上候通り御役（ひたすら）御入込（いろいろと込りまじること）ニ相成候得共　道路を支候者即硬命者不支者不硬命者　判然ご筋合（筋道）相立可申候処　其義も御採用相不成　此儘ニ而大軍差向候而疑惑凝結之士民硬命者不硬命者之無差別　一同境上ニおいて相拒候者必然之勢ニ御座候処　其旨悉御裁許違背之罪人御取扱御誅伐被相成而ハ二州焦土不被爲成候而ハ尽期無之訳ニ而如何ニも残忍之御事落合（決着）　其末如何成禍害を生可申も難斗遂ニ堂々タル官軍百世之下　乍恐名義公論何連ニ帰可申哉　御行懸りとハ乍申実以残念心外之事ニ而不忍沈黙　何卒御上も御遠謀被爲在度奉存候　何連共御役々御入込之義ハ不都合被爲在候得（御懸念も被爲在候得ハ不都束ながら監物在所迄なり共差遣し達命否と半途硬命之次第得斗押合状態委悉申上候上ニ而問罪之御次第判然御告諭ニ相成候様仕度　然スレハ条理明瞭人心知方決意奮戦可仕と奉存候　右御聞届被下候得ハ御討入期日暫御猶予ニ相成候而ハ　勿論事実難相歩　并宍戸備後助小田村素太郎等身前之義兼々申上置候通歩合も有之候処　自己之御不審有之との御書取之趣ハ承知仕候得共　其儀なれハ尚更一応御差戻大膳父子より申付　名目消滅仕候上ニ而如何様共ご措置被爲在候様被成下度　実以是（天下之）大危難今日ニ差迫り　一国之浮沈者回顧仕」候場合ニも無御座御不爲与心付御趣意得斗服膺不

仕し而軽薄追従阿諛之姿ニ相成候而ハ　乍恐奉対烈祖候而も申上訳も無御座次第殊ニ諸藩討手之面々と事違ひ最初より御取次等被仰付候御手続も委悉承知仕候義ニ付　不顧僭越不憚忌諱有体申上候微衷御洞察被成下候様仕度奉万祷候　前文之次第ニ付昨日御届申上候趣ハ御座候得共　人数繰出候義ハ先差扣重大之御事柄ニ付ご趣意得斗服膺仕候迄ハ何分相伺度赤心ニ御座候間不悪御汲取早々御沙汰御座候様仕度奉存此段申上候

六月四日

御名

(※この引用部分はくずし字で記されている。)

書き下し

朝早く起く。結髪。浄専寺に赴き浅児の初祭を設けんと欲す。雨甚だし。簑傘路服部氏に赴く。不幸にして翁家に在らず。転じて郡獄府に赴く。亦翁未だ在らず。乃ち言を官隷に託して去る。堠楼下涯を過ぐる、屠者の爲医者小泉権太左衛門なる者の舟、不幸にして権太帰家に家帰り、舟在らず。蓋し家大人の疾を視さしめんと欲するなり。又渡津して西浮屠街に赴かんと欲す。不幸にして水漲りて渡船出でず。乃ち中島を曲路して去（ゆ）く。浄専寺に赴く。作州の兵是に屯す。是雑遝（ざっとう）極る。祭終りて後、無涯師と閑話す。しばらくして帰る。午牌片田姪来たる。日本外史を質問す。黄昏沓内生と山下氏に赴く。帰路梅園氏に赴く。夜亥牌帰る。茲の日、服部翁来たりて曰く、長防二州海岸戦方に盛んならんとす。各所報来たりて曰く、細川氏の兵下関に入る。幕兵大島郡に入る。且つ、備前以西海賊多く、白昼物を掠む、と云ふ。吾君の四日上する所の書を得て、曰く、

「長防御討伐に付、心付申し出仕り置き候書付へ御書取を以て御通達の趣、承知仕り候　重ねて菟（と）ャ角（かく）申上候様御聞取下され候ては、恐れ奉り入り候へども実に以て皇国の御大事に付、右をも顧みず、赤心（まごころ）包蔵（内にかくしもつこと）無く申し出仕り候。

抑も吉川監物より期限御猶予相願ひ、格別を以て御聞届と相成り、夫々帰邑仕り候上は　大膳父子へ達命出来難き義は、之無き筈、又其上にも半途にて相支え候者、之有り、実に其の者即御裁許（裁断）相拒み候ものに付、右の輩を御誅伐成られ候御旨趣も相伺ひ御事柄の義に付、尚熟考仕り候処、右御書取にては、第一大膳父子へ達命仕り候や否の義、并に半途にて相支え候やの分堺（区別）不明瞭のみならず、硬命の輩（頑に命に背く者たち）御誅鋤（ちゅうじょ：殺しつくすこと）の御趣意にても百万之士民中、誰硬命、誰不硬命申見分けも付け難く、何を標的（規準）として討伐仕るべきやに、兼て申し上げ候通り、御役々（やくやく：もっぱら)御入込（いりこみ）に相成り候へども　道路を支え候者、即硬命なる者、支えざる者不硬命なる者、判然ご筋合（筋道）相立つべく申し候処、其義も御採用相成らず、此の儘にて大軍差し向け候て疑惑凝結の士民、硬命なる者不硬命なる者の差別無く、一同境上において相拒み候は必然の勢に御座候処　其の旨悉く御裁許違背（命令にそむくこと）の罪人御取扱御誅伐相成られては、二州（長州・防州）焦土成らせられず候ては、尽きる期之無き訳にて、如何にも残忍の御事落合（決着）、其の末如何なる禍害を生じ申すべきも計り難く、遂に堂々たる官軍百世の下、恐れながら名義公論いずれに帰し申すべきや 、御行懸かりとは申しながら、実に以て残念心外の事にて沈黙するに忍びず、何卒（なにとぞ）御上も遠謀在らせたく存じ奉り候。いずれとも御役々御入込みの義は、不都合在らせられ候へば家来ふつつかながら監物在所（居場所）迄なりとも差し遣し、達命否と半途硬命次第とくと押合い（交渉すること）状態委悉申し上げ候へば、問罪の御次第判然御告諭相成り候様仕りたく、然すれば条理（物事の道理）明瞭、人心知方、決意奮戦仕るべくと存じ奉り候。右御聞き届け下さり候へば、御討入期日暫く御猶予に相成り候ては、勿論事実相歩み難く、并に宍戸備後助、小田村素太郎等身前の義、かねがね申上げ置き候通、歩み合ひも之有り候処、自己の御不審之有りとの御書の趣は承知仕り候へども、其の儀なれば尚更一応御差戻し大膳父子より申し付　名目消滅仕り候上にて、如何様ともご措置在らせられ候様成し下されたく　実に以て天下の大危難今日に差迫り　一国の浮沈は回顧仕り候場合にも御座無き御不爲と心付御趣意とくと服膺（ふくよう）仕らずして、軽薄追従阿諛（あゆ）の姿に相成り候ては、恐れながら烈祖候に対

し奉りても、申上訳も御座無き次第、殊に諸藩討手の面々と事違ひ、最初より御取次等仰せ付られ候御手続も委悉（いしつ：ことごとく）承知り仕候義に付、僭越を顧みず、忌諱憚らず有体（ありてい）申上げ候、微衷（びちゅう：自分のまごころ）御洞察成下され候様仕りたく、万祷奉り候、前文の次第に付、昨日御届申上げ候趣は御座候へども、人数繰出し候義は先づ差扣え（さしひかえ）、重大の御事柄に付御趣意とくと服膺仕り候迄は、何分相伺ひたく赤心に御座候間、悪しからず御汲取り早々御沙汰御座候様仕りたく奉存じ奉り、此段申上げ候

六月四日

御名　」

口語訳

朝早く起きる。髪を結う。浄専寺に行き、浅児の初祭の準備をしようと思う。雨が激しく降る。簑傘をさして、の路を服部氏のもとに行く。悪いことに翁は不在であった。行く先を変え、獄府に行く。また翁は不在であった。そこで伝言を役人に託して辞去した。堠楼下涯を過ぎる。屠者のため、医者小泉権太左衛門という者の舟は、あいにく権太が家に帰っていて無い。そもそも家大人の病気を診察して貰おうとおもったのである。また渡船しようと思って西寺町に行くと、悪いことに水が溢れて渡船が出ない。そこで中島に回り道をして行く。浄専寺に行く。作州の兵がこの寺に駐屯している。多くの人でどくひ混み合っている。初祭が終わって後、無涯師と閑話を交わした。しばらくして帰った。正午、片田の姪がやってき来て、「日本外史」に関して質問する。夕刻、沓内生と山下氏のもとに赴く。帰り道、梅園氏のところに行く。夜午後10時頃、帰る。この日、服部氏がやって来て、言われるには、長防の二州の海岸戦が盛んになろうとしている。各所から報告が届いて、細川氏の兵下関に進出する。幕府軍の兵が大島に進入する、と。その上言うことに備前より西は、海賊が多く、白昼に物を掠め取る、という。

主君が四日に閣老に建言された書を手に入れた。それに書かれていることとは、

以下、建白書の内容がしるされている。それについては概略を記す。

幕府からの裁許を毛利大膳父子に伝えようとする道を塞いで妨げる者は、頑なに背く者、妨げない者は、命に背かない者と判然と筋道を立てるべきところ、その案も採用せず、このまま征討を行えば、頑なに命に背く者、命を拒まない者の区別なく、すべて御裁許に違背する罪人として取り扱って討伐することになる。そうなれば、長防二州は焦土となってしまう。どうか考えていただきたい。

先鋒の兵を繰り出すことはまずは差し控え、重大な事柄であるので、幕府としてのご趣意を十分納得ができるまでお伺いしたい。

十一日　晴

朝如例　帰路過城南馬埒面山下子　午眠　屠者医来視　家大人之病状曰　飲霖雨水之所致而已　未牌萱堂赴松本氏　余申牌赴白島紺屋　転弔石津氏　黄昏赴松本氏　夜子牌侍（待か）萱堂帰

注

・屠者医　未詳　・霖雨水　ながあめのみず。・萱堂　母のこと。

書き下し

朝例の如し。帰路城南馬埒山下子に面す。午眠。屠者医来視す。家大人の病状を曰く、霖雨水を飲むの致す所のみ。未牌萱堂松本氏に赴く。余申牌白島紺屋に赴く。転じて弔石津氏を弔ふ。黄昏松本氏に赴く。夜子牌萱堂の帰るを待つ。

口語訳

朝はいつものとおり。帰り道、城南の馬埒で山下さんに出会う。午眠。屠者医がやって来て、診察する。家大人の病状について言うには、長雨の水を飲んだというだけのことである、とのこと。午後2時ごろ、母上が松本氏の許にいく。わたしは午後4時頃、白島の紺屋に行く。そして行く先を変えて、石津氏を弔問する。夕刻、松本氏に赴く。夜、午前0時頃、母上の帰りを待つ。

十二日　晴

朝如例　昨与高間君山下君松尾君沓内君約食鶯

是以未牌与沓内君赴高間氏　挈鶩二而過山中氏埋殺之而帰于沓内氏　黄昏与木原君藤田君赴酒家?　夜烹而喰之　蓋加于前者松浦君藤田君也　木原君至而已不喰

注

・鶩　鶩鳥　・埋殺　どのようにするのか未詳。

書き下し

朝例の如し。昨、高間君や山下君、松尾君、沓内君と食鶩を食すを約す。是を以て、未牌沓内君と高間氏に赴く。鶩二を挈して山中氏に過（たちよ）る。之を埋殺して沓内氏に帰る。黄昏木原君藤田君と酒家に赴き、賕ふ。夜、烹て之を喰ふ。蓋し前者に松浦君藤田君を加ふるなり。木原君至るのみ、喰はず。

口語訳

朝はいつものとおり。高間君・山下君・松尾君・沓内君と鶩鳥を食べようと約束する。それで午後2時頃、沓内君と高間氏のところに行く。鶩鳥二羽を携えて山中氏の所に立ち寄る。この鶩鳥を埋殺して沓内氏の所に帰る。夕刻、木原君と酒屋に行き、酒を買う。夜煮てこれを食べる。さて前者に松浦君と藤田君が加わる。ただ木原君はやって来ただけで、鶩鳥を食べなかった。

十三日　晴

朝早出　頗腹瀉　午後写字　未牌後与松斎兄帰　自前八日幕兵発厳島　至十一日戦于大島郡　後雖連朝戦　幕兵不近于海岸　是以徒投玉薬于海而已　是以互無勝敗云

注

・瀉　下痢する。・自前八日幕兵発厳島　七日厳島宿陣中の幕兵一部隊、軍艦三艘に乗り組み、防州大島に向けて出発す。八日、幕府富士丸・翔鶴丸・八重丸は進んで防州大島郡の多賀浦を砲撃す。（「広島市史」）・玉薬　弾薬

書き下し

朝早く出づ。頗る腹瀉す。午後字を写す。未牌後松斎兄と帰る。前の八日より幕兵厳島を発ち、十一日に至り、大島郡に戦ふ。後、朝に連り戦ふと雖も、幕兵海岸に近寄らず。是を以て徒に玉薬を海に投ずるのみ。是を以て互に勝敗無しと云ふ。

口語訳

朝早く出る。たいへん腹がくだる。午後字を写す。午後2時頃、松斎兄と帰る。先日八日より幕府の兵が厳島を出発して、十二日に至って大島郡で戦う。その後朝廷軍と連携して戦うといっても幕府の兵は海岸に近づかない。それで無駄に弾丸を海に撃ち込むだけである。そんな訳で、互いに勝ち負けはつかなかった、と云う。

参考

紀州藩家老水野大炊頭は紀州隊を率いて、佐伯郡廿日市駅に進出する。（「広島市史」）

十四日　晴

朝如例　自茲日使皆早上学　蓋従于例而避午熱耳　過市賕平胃散帰　姉通疾而不能起　使服平胃散則吐虫　是以知疾之本于虫也　申牌沐浴　茲日与松斎兄約賀松尾君任官　時報曰　吾一陣二陣之兵屯聚于東演武場及南門之側宮　其時松斎君兄来曰　今日昧爽井伊榊原之兵進而入敵境　今也大敗走兵鋒既迫于草津海云　乃変約登城面于安藤君尋之亦不詳　帰路過一町目街紀州公陣営前　兵士雑遝輻湊極　夜与松斎兄過木原氏　復転与山下君三人過市　榊原井伊敗卒方帰　其敗軍之醜態不可見　被金創者受弾丸者罷而不能歩露　臥于路者挿白麾于腰而約身于馬上　伏臥如死者　脱甲而荷之者　約脱甲馬背　馬罷而如不能歩　以縄而約刀十数而荷者　提折鋒者　累々而帰　時戦袍帕首提矛而西走者　亦続々不絶　蓋紀州兵之于戦也　帰路過城中　吾兵方聚茲夜　吾兵之屯聚于南門之側宮者赴于古江　茲夜青山公亦疾馳而帰于吉田保守之　家大人朝赴獄府至明朝昧爽帰

注

・昧爽　未明　・約身　身を縮める「約」は、つかめる、まとめるの意も。・一町目街紀州公陣営　征長軍総督紀伊中納言徳川茂承の御用屋敷を本営とした。・輻湊　四方から寄り集まること。物が一所にこみあうこと。また、そのさま。・金創　刀・槍などの金属製の武器で受けた傷　・白麾　軍隊

の指揮者のもつ旗　・戦袍帕　戦闘のための服、はちまき。

書き下し

朝例の如し。茲の日より皆をして早く上学せしむ。蓋し例に従ひて午熱を避くのみ。市に過（たちよ）り、平胃散を賒ひ帰る。姉通疾して起く能はず。平胃散を服せしめば、則ち虫を吐く。是を以て疾の本虫なるを知るなり。申牌沐浴。茲の日松斎兄と松尾君の任官を賀すを約す。時に報じて曰く、吾一陣二陣の兵東演武場及南門の側宮に屯聚す。其の時、松斎君兄来たりて曰く、今日昧爽井伊榊原之兵進みて敵境に入る。今や大敗す。走兵鋒、既に草津海に迫ると云ふ。乃ち約を変じ登城す。于安藤君に面す。之に尋ぬるも亦不詳なり。帰路一町目街紀州公陣営前を過ぐ。兵士雑遝輻湊極む。松斎兄と木原氏に過（たちよ）る。復た転じて、山下君と三人市を過ぐ。榊原・井伊の敗卒方（まさ）に帰らんとす。其の敗軍の醜態見るべからず。金創を被る者、弾丸を受く者、罷りて露を歩く能はず。路に臥す者、白麾腰に挿して身を馬上に約し、死者の如く伏臥す者、甲を脱して之を荷ふ者、甲を脱ぎて馬の背に約（ちぢ）む。馬罷りて歩く能はざるが如し。縄を以て刀十数を約して荷ふ者、折鋒を提する者、累々として帰る時、戦袍帕、首矛を提げて西走する者、亦続々として絶たず。蓋し紀州兵の戦に赴くなり。帰路城中を過ぐ。吾兵方（まさ）に茲の夜聚（あつま）らんとす。吾兵の南門側宮に屯聚する者、古江に赴く。茲の夜、青山公も亦疾馳して吉田に帰りて之を保守す。家大人朝獄府に赴き、明朝に昧爽に至り帰る。

口語訳

朝はいつものとおり。この日より皆を早く上学させる。つまり、前例に従い、昼間の熱射を避けるだけのことである。市に立ち寄り平胃散を買って帰る。姉の通が病気で起きあがることができない。平胃散を飲ませると虫を吐き出した。それで病気の原因が虫にあることが判った。午後4時、沐浴。この日松斎兄と松尾君の任官の慶賀に行こうと約束した。ちょうど知らせがあって、言うことに、わが藩の一陣、二陣の兵が東演武場及び南門の側の社に集結している、と言う。その時松斎兄がやって来て、言うことに、今日未明、井伊・榊原の兵が進軍して敵地に進入し、今や大敗した。敗走の先頭はすでに草津の海に迫っている、と言う。それで約束を変更して登城し、安藤君に会う。安藤君に尋ねても詳しいことは分からない。帰り道、一丁目街の紀州公の本陣前を通り過ぎる。兵士がたくさん入り混じって、ごたごたを極めている。夜、松斎兄と木原氏の所に立ち寄る。また行く先を変えて山下君を加えて三人と市中を通り過ぎる。榊原、井伊の敗卒が今や帰ろうとしている。その敗軍の醜態は見るに耐えない。刀・鎗の武器で傷を被った者、弾丸を受けた者、まかり出て歩くあたことができない。みっともなく路に臥す者。白旗を腰に挿して馬上で身を縮めている者。死んだ者のように伏せっている者。甲を脱いでそれを背負っている者。甲を脱いで馬の背で縮こまっている者。馬がまかり出て歩くことができないような者。縄で刀を十数をまとめて背負う者。折れた槍を提げている者が連なって帰ってくる。時には戦いの服・はちまきで首に矛を提げて西に逃げる者も亦ぞくぞくとして絶えない。思うに紀州公の兵が戦に臨んだのである。帰り道城中を通り過ぎる。わが藩の兵がちようどこの夜集結しようとしている。わが藩の兵で南門の側の社に集結していた者は、古江に向け出動する。この夜青山公も亦馬を急ぎ馳せて吉田に帰り、これを保守する。家長は朝獄府に行き、明くる朝、未明に帰る。

十五日

朝早起　沓内生来　共赴于松島　通疾而困臥　爲賒薬于市　路過城南埒調馬　茲日始聞昨日戦争之詳説　曰自東道先鋒之期限在昨日　是以旬三之日榊原之兵陣于小方村而在北井伊之先鋒木全某在小瀬川之東濱　其中後軍在于鍋蔵山之東麓将出于大竹村　続于先鋒而進長兵則陣于小瀬川之西濱　諸山連砲而以待十四日昧爽　榊原之兵進而欲越鍋蔵山之所謂苦野坂而西向　是時長兵既在坂嶺而挙火　則西方之諸山皆応焉而榊原之兵不知之也　徐々攀坂而将至于坂嶺　利有兵　覆林而放火砲下撃之　榊原愕然敗走　長兵追之至小方村　榊兵止而奮戦　時在山之東麓之井伊兵聞砲声而疾走登于山嶺　則長兵亦放大砲而急撃之　井伊不能支而走于山

麓而榊兵終敗走　蓋榊兵之奮戦也　其後軍不戦而退走　是以皆潰　長兵既破榊原兵于小方而直下山続出井伊兵之先鋒亦進欲渡小瀬川　半渡長兵逆撃而塵殺之　木全某亦死云　是以二家之潰兵悉退于四十八坂　然二家之元帥皆竊走而先帰　其死傷不可知也　抑可悲者民也　大竹・油見・小方・玖波等之民屋悉焼尽爲灰　其煙焔漲天也　自広陵望而可弁　長兵陣于玖波・小方　茲日城六兵衛与塚吏片岡太一等艤舟而将登于大野而鎮撫逢于兵之民漸近于陸則有長兵放砲如雨　舟人大駭　皆潜匿伏于船腹　六兵衛大怒独上于屋而怒視之　終受丸而斃　誠可悲也　長兵之暴可悪也

然長号令不一乎　有爲暴者　有施恵者　午眠　通困臥抑掻之　申牌賀于松尾氏　帰赴松本氏

夜帰　茲夜得家大人之音信

注

・困臥　苦しみ臥す。・６月14日の戦闘の詳細を聞いて、記されている。後に示す「参考」と併せ読んでいただきたい。

・旬三之日　13日のこと。旬は10日　一カ月は三旬。初旬・中旬・下旬。・艤舟　船出の用意をする。・広陵　広島　・鎮撫　反乱を鎮め、民の心を安んじること。・号令不一　命令が統一されていない。・抑掻　いらだちなどをおさえる。

書き下し

朝早く起く。沓内生来たる。共に松島に赴く。通、疾して困臥し、爲に市路に薬を賒（か）ふ。城南馬埒調馬を過ぐ。茲の日始めて昨日の戦争の詳説を聞く。曰く、東道より先鋒の期限昨日に在り　是を以て旬三の日、小方村に陣して在り、北、井伊之先鋒木全某小瀬川の東濱に在り。其の中、後軍鍋蔵山の東麓に在り。将に大竹村に出でんとす。先鋒に続きて長兵進めば、則ち小瀬川の西濱に陣す。諸山上砲を連ねて以て十四日昧爽（まいそう）を待つ。榊原の兵進みて鍋蔵山の所謂苦野坂（くのさか）を越えんと欲して西向す。是の時、長兵既に坂嶺に在りて火を挙ぐれば、則ち西方の諸山之に応じて、榊原の兵之を知らざるなり。徐々坂を攀りて将に坂嶺に至らんとすれば、利、兵に有り、覆林して大砲を放つ。下之を撃つ。榊兵愕然として敗走す。長兵之を追ひ、小方村に至る。榊兵止まりて奮戦す。時に山の東麓に在る井伊兵、砲声を聞きて疾走し山嶺に登れば、則ち長兵も亦放大砲を放ちて之を急撃す。井伊支ること能はずして山麓に走りて、榊兵終に敗走す。蓋し榊兵の奮戦なり。其の後軍戦はずして退走す。是を以て皆潰す。長兵既に榊原兵を小方に破りて直に下山す。続きて井伊兵の先鋒も亦進みて小瀬川を渡らんと欲す。半渡にして長兵逆撃して之を塵殺す。木全某も亦死すと云ふ。是を以て二家の潰兵悉く四十八坂を退く。然るに二家の元帥皆竊に走りて先に帰る。其の死傷知るべからざるなり。抑も悲しむべき者は民なり。大竹・油見・小方・玖波等の民屋悉く焼尽し、灰と爲る。其煙の焔天地に漲る。広陵より望みて玖波・小方に陣する長兵を弁ずべし。茲の日、城六兵衛塚吏片岡太一等と艤舟して特に大野に登りて兵に逢ひ之を鎮撫す。、民漸く陸に近づけば、則ち長兵の放砲雨の如く有り。舟人大いに駭き、皆潜匿し船腹に伏す。六兵衛大に怒り独り屋に上りて怒り、之を視る。終に丸を受けて斃（たお）る。誠に悲しむべきなり。長兵の暴悪（にく）むべなり。然るに長の号令一ならざるか、暴を為す者有り。恵を施す者あり。午眠。通困臥し、之を抑掻（よくそう）す。申牌松尾氏に賀す。帰り松本氏赴く。夜帰る。茲の夜家大人の音信を得る。

口語訳

朝早く起きる。沓内生がやって来る。一緒に松島に赴く。姉の通は病気で苦しみ、床に臥している。そのため市中に出かけて薬を買い求める。城南の馬埒調馬を通り過ぎる。この日始めて昨日の戦争の詳しい説明を聞く。それによると、東道よりの先鋒の出撃期限が昨日であり、そこで十三日、榊原の兵が小方村に陣取りしており、北には、井伊の先鋒木全某が小瀬川の東の濱に陣どる。其の中、後軍は鍋蔵山の東麓に構える。大竹村に向かって進撃しようとする。先鋒に続いて長州兵が進撃すれば、則ち小瀬川の西の濱に陣地を敷く。諸山の上に大砲を連ねて、そうして十四日未明を待つ。榊原の兵が進撃して、鍋蔵山の所謂苦野坂を越えようして西に向かう。この時、長州兵は既に坂の嶺にいて烽火を挙げれば、たちまち西方の諸山の兵はこれ応じるが、榊原の兵はこれに気づかない。徐々に坂を登り坂嶺

に至ろうとすると、利は長州兵にあって、林に潜んで大砲を放つ。下からこれを撃つ。榊兵の方は愕然として敗走する。長州兵はこれを追い、小方村に至る。榊兵が止まって奮戦する。その時、山の東麓にいる井伊兵が砲声を聞いて疾走し山嶺に登れば、ただちに長州兵もまた大砲を撃って、これを急撃する。井伊軍はもちこたえることができず山麓に逃げ走って、榊原の兵は終に敗走する。思うに、榊原兵の奮戦である。その後榊原軍は戦うことなく退走す。それで皆潰滅する。長州兵は既に榊原兵を小方において破って、直に下山する。続いて、井伊兵の先鋒もまた進撃して小瀬川を渡らんとする。半ば渡ったところで長州兵が逆に攻撃して、これを打ち砕く。木全某もまた戦死した云う。それで井伊、榊原の二家の潰滅した兵は悉く四十八坂を退脚する。それなのに二家の元帥は皆こっそりと逃げて先に帰る。戦での死傷者の数は知ることができない。そもそも悲しまなければならない者は民である。大竹・油見・小方・玖波等の民家は悉く焼き尽し、灰となる。その煙や焔は天地を覆い尽くす。広島からはるか眺望して玖波・小方に陣を敷いている長州兵を見分けることができる。この日城六兵衛は椽吏（えんり）片岡太一等と舟出の用意をして、特に大野に登りって兵士に出会いこれをしずめなだめる。民が漸く陸に近づくと、たちまち長州兵の放砲が雨の如くやってくる。舟人は大いに驚いて、皆潜り隠れ、船腹に伏せる。六兵衛大に怒り独り家屋に上って怒り、これを視る。終に彈丸を受けて斃れる。誠に悲しむべきである。長州兵の暴挙は憎んで当然である。そうであるが長州の発する号令は一様ではないのか、暴挙をなす者がいたり、恵を施す者もある。午眠。通は苦しみ臥し、このいらだちを抑える。午後4時、松尾氏の所にお祝い行く。帰り、松本氏のところに赴く。夜帰る。この夜家大人の音信が届く。

参考

「広島市史」から、6月14日の戦闘についての記述を紹介する。

「征長軍芸州口先鋒井伊家掃部頭（かもんのかみ）直憲（彦根藩主）榊原式部大輔政敬（越後高田藩主）は幕府の陸軍奉行竹中丹後守・大目付大平鉱次郎等と共に、大軍を率い、進んで佐伯郡玖波駅に陣す、十四日の黎明、先鋒なる原田兵庫・中根善次郎（榊原軍の隊将）の二隊中より、物頭建部造酒之助の一隊に大小砲兵隊を附し、進んで芸防両国の境なる大竹川（一名、小瀬川）の東岸に至らしむ、然るに是日未明、長防軍は大竹川に渡船十艘を予備し、游撃隊は関戸峠を越へて小瀬村に進出す、副督河瀬安四郎これに将たり、既にして大竹川を渡り、隊兵を三分し、一隊は本街道を進みて小方村（佐伯郡）に向ひ、一隊は大甲良山に登りて油見村（佐伯郡）を腑下し、又一隊は河岸に沿ひ大竹村向ひて進む、払暁に及びて、東軍の建部隊は岩国領なる和木村の山上に敵が擬兵を設け、旌旗を樹つるを見て、河流を隔てて之れを砲撃す、其応戦せざるを知るや後続隊なる原田・中根の隊つぎ来たりて、大竹川の東岸に陣容を整ふ、井伊家掃部頭の本体亦た大竹村に到着し、ともに盛んに大小砲を放ちて、遂に和木村を焼く、岩国軍の隊将長谷川藤次郎・品川清兵衛、戢翼団（しゅうよくだん）兵を率いて、和木渡舟場の長堤竹林中に潜伏し、東軍の進み来るを待つ、是時井伊軍の中より一騎馬武者、紅色の陣羽織を着し、鞭を挙げ、大叫して進み出て、河流を渡る、従兵二人これに随ふ、中流に抵（いた）れる頃、岩国戢翼団の伏兵俄に起り、竹林中より百銃斉発（一斉射撃）す、彼の騎武者弾丸に中（あた）り、忽ち水中に斃（たお）る、従兵も亦一名は戦死し、一名は遁れ去る、岩国兵其機に乗じて進み来り、其首級を獲り、守袋を披（ひら）き見て、彦根藩御使番竹原七郎兵衛たるを知る、東軍俄に伏兵の起れるを見て驚き、小方村に退却せむとす、時に長防の游撃隊は三方同時に起り、山々峯々より盛んに大小砲を放下し、大竹・立戸・油見の山村に地雷火を爆発し、又玖（苦）の坂よりも砲撃して其退路を遮る、戢翼団兵亦た河流を渡りて追撃すること益々急なり、井伊・榊原の兵苦戦に陥り、終に陣を玖波の海浜に移し、堤防に拠りて砲戦せしも、三方の敵軍に包囲せられ、援軍も亦た来らずして遂に支ふる能はず、掃部頭は運搬船に乗じて広島に逃れ還り、誓願寺の本陣に入る、敗兵多くは海浜に沿ひて廿日市に敗走し、又は先を争ひて漁船に乗じ、広島に遁るるもの少なからず、榊原軍の本体は大野村に在り、之を四十八坂に支えんとせしが、支ふる能は

ず、広島に退却す、長防の軍の游撃隊は大竹・油見を焼き払ひ、小方村に遺棄せし甲冑・鉄砲・刀槍の類甚だ多く、長兵これを収めて道路に丘をなせり、長防軍乃ち大竹村にて捕虜とせる彦根・高田両藩の歩卒等ほを放置し、其髻（もとどり）に結付たる紙片に書して曰く、

井伊掃部頭

榊原兵部大輔

其方共、先祖にも相似ず武辺（武芸）に疎く、此度敗北に及び候故か　鏖殺（じんさつ：みなごろしにする）致し候処、幕府に対し寛大の処置を以て、生虜（いけどり）の者及び傷人は薬用を加へ、玖波村迄送り遣はし候間、懸念無く速やかに申出づべき器械は慥かに預り置き候間、此上は武断相励み請け取りに来べきものなり、

翌日、長防軍は大竹川渡舟場に大仮橋を架設し、以て兵馬糧餉（りょうしょう：糧食）の運搬に便にし、進んで玖波駅に陣し、谷波に本陣を定む、幕軍・彦根・高田・紀伊・大垣等の兵四十八坂の嶮路を前にし、大野村に胸壁（きょうへき：敵の弾丸を防ぐために土などの散兵壕の敵方に積み上げたもの。とりで。）を築きて屯陣せり

あとがき

第二次征長戦争はこのあとしばらく続き、日記も８月16日まで記されているが、紙面の都合で以下は次号に譲りたい。原稿の期日もあって内容的に不十分なところも多い。お許し願いたい。

学園だより

修学旅行報告

片　山　行　弘（修道高等学校５年学年主任）

修道高等学校修学旅行利用客船「ふじ丸」23,235トン

５年生は、６月17日(火)～20日(金)、３泊４日の日程で屋久島・種子島方面への修学旅行に行ってきました。屋久島は「ひと月に35日雨が降る」と言われるほど雨の多い所です。しかも出発前の天気予報はあまり期待できるものではありませんでした。それがなんと３日目まで一滴の雨に降られることもなく、予定した行事をすべて順調に実施できたのには、何か神がかり的なものを感じました。広島に帰ってくると船の外は大雨でした。

この修学旅行は、大型客船「ふじ丸」を利用した優雅な旅で、船の中も楽しみがいっぱいです。まさに「海に浮かぶホテル」でした。初日の昼食は大海原を一望しながらのデッキランチ、夕食はテーブルマナーの講習を兼ねてフルコース料理と食事も大変豪華なものでした。幸い、船酔い等で体調を崩す生徒も少なく、船内では、音楽班によるライブ、映画鑑賞、カラオケ、卓球など、それぞれが思い思いに楽しみました。最終日には、操舵室の見学もさせていただきました。

屋久島では、事前の希望調査に基づき、７つのコースに分かれて研修を行いました。どのコースも「世界遺産 屋久島」の大自然に触れることができるようになっています。樹齢数千年の屋久杉や清流を見ながらの森林浴には大いに癒されました。夜には「タイドプール＆ウミガメ」コースの生徒達が、ウミガメの産卵見学に出かけました。ちょうど２頭のウミガメが浜に上がってきており、産卵の様子を静かに見守りました。命の尊さを感じる瞬間でした。(写真は、「白谷雲水峡」コースと「ウィルソン株」コースの様子です。白谷雲水峡は、映画『もののけ姫』の舞台になった森です。)

種子島では、島間港で下船して、全員で鉄砲試射の見学をした後、３種類の研修コースに分かれてバスで出発しました。屋久島とは対照的な平らな島

で、美しい海岸線を眺めながら、門倉岬や千座の岩屋などを訪ねました。また、どのコースにも種子島宇宙センターの見学が組み込まれており、最先端の技術を目の当たりにして、人類の英知と限りない宇宙へのロマンを感じることができました。（写真は、鉄砲伝来で有名な門倉岬および「シーカヤック研修」コースの様子です。）

この屋久島・種子島修学旅行には、私も今回初めて同行したのですが、なかなか体験できないであろう素敵な世界へ連れて行ってもらえたと感じています。生徒達もこの旅を十分に満喫できたようです。この貴重な経験を一生の思い出としてしっかりと心に刻み込んだことでしょう。この修学旅行は、船会社の方、旅行会社の方、現地のガイドさんなど、非常にたくさんの人々に支えられて実現しています。皆様のご苦労に心から感謝いたします。どうもありがとうございました。

白谷雲水峡

ウィルソン株

シーカヤック研修

鉄砲伝来で有名な門倉岬

人物往来

「JRN・JNNアノンシスト賞」テレビ「読み・ナレーション部門」最優秀賞受賞

本名　正憲氏（高校33回・中国放送アナウンサー）

中国放送の本名正憲アナウンサー（高校33回）が系列局三十九局の優秀なアナウンサーに与えられる「JRN・JNNアノンシスト賞」のテレビ「読み・ナレーション部門」で最優秀賞を受賞した。

本名アナウンサーは、昨年九月放送の番組「意地にかけても～島の男たちの櫂伝馬競漕～」で、ナレーションを担当し、優れたアナウンス技術を認められた。

アノンシスト賞はテレビやラジオなど七部門あり、中国放送は六年連続で最優秀賞や優秀賞を受賞している。

（中国新聞08.5.25）

若手育成に夢を抱く　アマチュアゴルフ界の星～第二の石川遼くんの誕生を願って～

田村　尚之氏（高校35回）

田村尚之は、今年５月広島県アマチュアゴルフ大会で５連覇を達成すると共に13回目の王座に輝いた。広島県の誇る“アマチュアゴルファーの星”だ。

真摯にゴルフに向き合い、94年にもアマチュア界最高峰といわれる日本オープンでローエストアマになっている。この時誰もが将来プロの道に進むことを予感した。しかし、田村自身は、プロへの転身という気持ちはない。「ゴルフは、人間力全ての勝負。自分は、若きニューヒーロー誕生のために努力したいと」と語る。

田村が、５月の13回目の王座を獲得した広島アマチュアゴルフ大会で、田村に迫った若者がいた。幡地隆寛（中３）君だ。二日目、最終組二打差リードでスタートし、田村に先行した。この瞬間、ニューヒーローの誕生が期待された。しかし、プレッシャーの中、幡地はドライバーショットが乱れ、７番でボギーを叩き、田村が逆転した。その後、田村は独走体制に入る。田村の安定したショットやパットに対し、幡地はスコアが伸びず、２バーディー６ボギーでホールアウト。二日間で八打差あけて田村は優勝。ニューヒーロー誕生はお預けとなった。

田村は、小学生のときに父親に連れられてゴルフを始めた。中２の時、いきなり中国ジュニアで二位に入賞し、翌年には関西ジュニアで優勝した。この時の父親の教えは「好きなことをやるなら一番になれ」だった。学校からは「進学をとるかゴルフをとるか」と迫られたこともあるが、田村自身はあくまでもゴルフは“趣味”と決めていた。大学に進学後もゴルフ部にも入らず、帰郷の時ゴルフを楽しむ程度だった。

しかし、転機はあった。一人っ子故に広島にUターン、マツダに勤務することになった。「人との付き合いは大事だから」と父から薦められ、ゴルフは続けた。賀茂カントリークラブのメンバーを買い、休日ゴルフを楽しむようになった。この頃、組合から有給取得を迫られたのでたまたま出たという、広島県アマチュアゴルフ選手権で何と優勝。大々的にマスコミで取り上げられた。「報道されたことで、職場の方も応援してくださるようになった。」これをきっかけに、大会への出場を続けることになった。身長172センチで50キロ台とゴルファーでは小柄だが常に上を目指し筋力アップに励んだ。努力は報われ、1994年にはアマチュア最高峰の大会ローエストアマで優勝。ついに極めた頂点。仕事にもトレーニングにも励むサラリーマンゴルファーのお手本のような存在になった。しかし、この大会以降、田村は、タイトルから遠ざかってしまう。一流を冠された故か、大味なスイングをし、ショットの飛距離を出そうとする余りアプローチも乱れて、結果もなかなか出なくなっていった。

田村の変化を敏感に感じとっていたのが、ベテランゴルファーの佐伯行夫だ。現プロゴルファー佐伯三貴の父親である。97年の日本アマは下関市での開催だったが、その大会後の食事会で、佐伯から厳しい言葉がとんだ。「おい、田村。自分のプレーを分かっているのか？」「原点に返れ」この日から田村は自分のゴルフにじっくり向き合うことになる。練習方法をはじめとして基本に返り、三年間かけて本来のスタイルを取り戻したのだ。「あの時の一言一句全てが自分に当てはまる。自分本来のアプロー

チやパットで拾っていく泥臭いゴルフを忘れていた」。

この時の言葉をしっかりと胸に秘めるだけでなく、感謝して田村は成長していった。

07年のノムラカップアジア太平洋アマチュアゴルフ選手権の好成績により、今年４月のスペインで開催されたボナラックトロフィーにアジアパシフィック選抜メンバーに選ばれた。アジア選抜ヨーロッパ選抜で対戦し、結果こそ及ばなかったが、世界トップレベルの選手の実力を肌に感じた。「この経験を若者に伝えたい。そして、自分のゴルフが成長することが、必ず次世代の育成に役立つはずだ」。広島県から、第２、第３の石川遼君が出てくるのも、そう遠くはないだろう。

（2008. 6. 19広島経済レポート別冊）

石に聴く

畠　　眞實氏（高校７回・元校長）

最近、必要があって広島市内の顕彰碑などの石碑を訪ね、碑文を読んでいる。対象としているのは、山田養吉（広島藩の藩校の先生で修道学園の開祖）の撰文（碑文）によるものである。

例えば、鶴見橋たもとの「修路記」（竹屋村から段原村への道路改修の経緯）、二葉の里、明星院境内の「加藤種之介」（戊辰戦争への参戦の功績、加藤友三郎の兄）、祇園町の「大田三益」（医師・教育者としての功績）、己斐旭山神社ふもとの「土井百穀」（「遷喬舎」の設立などの功績）、泉岳寺の「表忠碑」（赤穂浪士の忠節）などの碑である。

多くの人は、石碑の存在に気づかれるであろう。それが何に、あるいは誰に関するものかと分かれば、それ以上せんさくすることはほとんどないのではなかろうか。まれに碑文に目を留めて近づいてみても、山田養吉の撰文などはすべて漢文で書かれていて、内容を読み取れない。その上、字画の多い漢字は摩耗したり、欠損したりして判読しがたい。また、全体が黒ずんでいて読めないものも多い。

そうした碑文を写真に撮るなどして一字一字時間をかけて解読し、あるいは撰文の原稿を探し出し、何とか内容を把握できた時は、時の流れに埋もれかけていた先人の思いや業績を掘り起こし得た、という喜びがわき上がる。いわば「石」に聴くといった思いである。時を超えて語りかけてくる先人の思いに、これからも耳を傾けていきたいと願っている。

（中国新聞2008. 6. 21）

全力プレー引き出す

三王　知治氏（高校26回）
北京オリンピックバドミントン審判員

「主役は選手。選手が全力を出し切る環境をつくり、観客からの拍手が渦巻く中に居合わせたい」。目立たず騒がず、穏やかに２回目の五輪舞台に臨む。

競技経験はサークル活動程度だった。試合に負けると審判役が回ってきた。不本意ではあったが、回を重ねるごとに試合さばきは上達。1994年広島アジア大会、96年の広島国体でジャッジを務めた。99年には国際バドミントン連盟（ＩＢＦ、現世界バドミントン連盟）公認国際審判となり、前回のアテネ大会を経験した。二度目の五輪派遣は予想もしていなかった。新聞には自分の名前と顔写真、そして「ＩＢＦ」の文字。「何か悪いことをしたかな」と焦ったという。「突然すぎてＩＢＦを『ＦＢＩ』（米国連邦捜査局）と見間違えた」

理想は「流れを切らせずに、白熱したプレーが続くこと」という。試合中、汗をふくときなど審判が認めた場合のみ、インターバルを取ることが可能だ。しかし、失点が続く悪い流れを断ち切るために要求する選手もいる。「この判断が難しい。でも顔や態度でだいだい分かる」と言うまでにキャリアを積んだ。

日本からはただ一人の五輪審判。前回は混合ダブルス決勝で主審を務めた。だが、「過ぎたことは忘れるようにしている」と、過去の経験にとらわれるつもりはない。「１回戦でも決勝でも、選手が試合にかける思いは一緒。やりきったという表情をしてくれたら審判冥利に尽きますね」と、名勝負の引き立て役に徹する。　（中国新聞08. 06. 24）

香川龍介君（高２回）の個展を祝して

林　　孝治氏（高２回）

香川君は1963年の第１回の個展より、今回で50回目を開催しました。心より、お慶び申し上げます。

平成20年７月10日（木）より16日（水）まで、広

島県民文化センターのフロアーを全部借り切って展示いたしました。

古い作品に加え、今年の9点の作品を含め、77点の大作の個展でありました。

77点は記念すべき「喜寿の祝い」の証でもあります。それは衰えを知らない創作意欲をもって、「米寿には」88点の個展を目途としている決意が読みとれます。

それは、水彩・油彩・ペン・鉛筆のそれぞれの作品でありました。

坂本善三氏を師と仰ぎ、絵画の追求をとことん行ってきました。その後、どんな美術団体にも属さず、自分独自の世界を見つめてきました。

青少年時代の彼らしく、時代に影響され、または、誘発し、自分の道を歩んで、今日まで生きてきました。

その時代と共に、自分を深く見つめ、考え、更に根本原理を深く追求しようとしている思われます。その原点が、象徴化され、抽象絵画への追求へと繋がったのではないでしょうか。

彼の人生を絵の本質を通じて、生きることへのチャレンジであり、決して締めない力強いものを表現するのではないでしょうか。

彼は絵が大好きだから、これまでも、できたのであり、これからも、絵画の核心を追求し、純粋で、オリジナルな美をこの世に残すために、体を大切にし、想いを大切にして、香川君らしく、活動を続けて下さい。

2008年(平成20年) 7月12日 (土曜日) 中国新聞

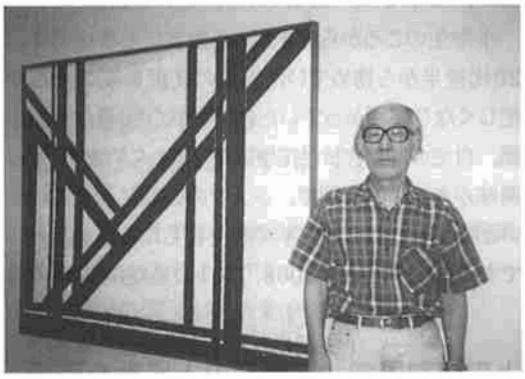
美術散歩

自問を込めた抽象画

香川龍介展 50回目の個展 19日まで 広島県民文化センター

中国新聞に掲載された記事

会場となった広島県民文化センターの玄関



香川龍介君と直近の作品

左から同級生の永谷道孝、林　孝治、香川龍介

近況報告

加藤　省吾氏（商大１回）

ナット・キング・コールなど、1960年代のスタンダード・ジャズをよく聴きます。ラジオから流れるのを耳にするうちに自然と好きになりました。

日曜の夜は、広島商工会議所地下１階で当社が運営するレストラン「メルキュール」にジャズ同好会のメンバー10人が集合。一杯やりながらピアノの伴奏でお気に入りの曲を歌います。披露できるほど上手ではありませんが、少人数でこじんまりと楽しんでいます。

大学生の時からサッカーを続けていたこともあって、サンフレッチェ広島の大ファン。六年前にけがを心配してプレー自体はやめてしまいましたが、サンフレの試合ではユニフォームやメガホンを身につけて大声で応援します。スポーツを盛り上げて広島を元気にしたいと、07年からアウェー戦のテレビ観戦を店内で実施。たくさんのファンと一緒に応援できるのが楽しいですね。同好会もサッカー観戦も休日や営業時間外に店を開けることになりますが、商売抜きの息抜きを兼ねた楽しいイベントです。これからも続けたいですね。

小学生のころから好きだった園芸にも夢中です。20代後半から務めていた実家の文房具屋の仕事が忙しくなり遠ざかっていたのですが、40年ぶりの再燃。自宅の庭に作った花壇は花で溢れています。今、興味があるのは料理で、シェフの娘婿に教えてほしいと頼んでいます。豊平で蕎麦打ちにも挑戦したいですね。　（2008.7.31広島経済レポート）

上田流和風堂　江戸期の上屋敷を再現

上田　宗冏氏（高校16回）

全国でも珍しい、江戸初期の武家文化を伝える上屋敷の構成再現、改修工事が完成した茶道上田宗箇流の(財)上田流和風堂（上田宗冏理事長）は、来年４月の特別公開にタイミングを合わせて地元ホテル、料亭とタイアップした「茶懐石フェア」（仮称）のほか、新たな切り口による観光ツアーも企画している。毎年定期的に開催し、広島の新しい「春の祭（行事）」として定着させていきたいとしており、地元発祥の茶道を通じて、広島を盛り上げていく。

このほど上屋敷の改修工事が完成し、11月に完成披露。建物や茶室、宗箇の作庭の才が遺憾なく発揮されている書院庭園、露地も再現し、武家文化を体験できる博物館機能も兼ねる。茶懐石フェアは、桃山、江戸期の茶会記などの資料を基に、期間限定で参加店のメニューに反映してもらう。市内や郊外の十数店に打診中で現在、リーガロイヤルホテル広島、ホテルグランヴィア、點心、半兵衛庭園、う越久、酔心などの参加が内定している。上田宗箇没三五〇年記念行事として、2000年には「大名茶人のもてなした桃山の茶懐石と菓子」の統一テーマで実施したが、今回は各店の特色や得意の分野を生かしたメニューづくりを進めていくことにしている。

旅行代理店や行政、関係機関と連携する観光ツアーも企画。和風堂の上屋敷－宗箇と縁のある岩国の吉川家の資料館－観光地宮島などの広域ルートを盛り込み、９月中にもプランをまとめる。歴史と茶道文化の“広島”をアピールし、新たな広島の魅力アップにつなげていく。関連イベントとしてＮＨＫが秋ごろ、宗箇の庭をテーマに特番を放映する予定のほか、４～５月には県立美術館の「大名庭園展（仮称）」など多彩な企画が組まれており、広島の観光振興の面からも相乗効果が期待される。　（2008.7.31広島経済レポート）

公園トイレ設計提案競技最優秀賞受賞

小川　文象氏（高校50回）

広島市が主催する公園トイレ設計提案競技において、小川文象氏（高校50回卒・ＦＵＴＵＲＥＳＴＵＤＩＯ代表）が最優秀賞を受賞しました。

このコンペは、公園をより使いやすく、快適に利用できるものにするため、広く民間から独創的なアイデアを求めたもの。小川氏の作品は、屋根の形が二等辺三角形。「屋根が真北を指す矢印となるもので、屋根の先端で一定方向を示すという、明確なコンセプトがあり、また、色彩のバリエーションにより、地域の特色を表現できる点で、作品にメッセージ性があり、広島ならではのメッセージを織り込むことができる可能性を内在している」と高く評価され、審査員全員一致での最優秀賞受賞となりました。小川氏のデザインは、広島市が今後整備する街区公園トイレの標準デザインに採用されることとなり、多くの市民が目にすることが多くなると思われます。　（広島市ホームページより）

ご就任おめでとうございます。

斉藤　鉄夫氏（高校22回）

2008年8月2日福田改造内閣において、環境大臣に就任されました。

島根県邑南町出身。東工大大学院で工学博士号を取得後、大手建設会社で宇宙ホテル建設など、幼少時からの夢だった宇宙開発研究に没頭した公明党きっての理系議員。今回、党政調会長から初入閣した。

教育、文化芸術分野を「ライフワーク」と位置付ける。物腰の柔らかさが持ち味だが、ほかの党幹部からは「人が良すぎて交渉力不足」との苦言も。56歳。衆議院当選5回。

「環境技術を生かす」（就任会見時コメント）

地球環境問題は喫緊の課題。少ない二酸化炭素排出量で物をつくるという環境技術については、日本は世界一。これを生かしていくことが、日本が世界に貢献し、経済力を増して福祉社会を向上させることにつながる。

増原　義剛氏（高校16回）

2008年8月5日福田改造内閣において、内閣府副大臣に就任されました。

広島市出身。東京大学法学部卒業後、大蔵省入省、大蔵省東海財務局長、環境・経済研究所設立を経て、平成9年衆議院議員に初当選、以降当選2回、平成16年に総務大臣政務官となる。63歳

増原氏の担当は、消費者行政の一元化、拉致問題、少子化対策など多岐にわたる。「国民の暮らしに密着した課題が多く、やりがいがある」。満面の笑みを見せた。

（中国新聞2008. 8. 6）

春の叙勲受章
おめでとうございます。

山下　泉氏（高校7回）

元日本ハンドボール協会副会長

旭日双光章受章

中学時代から始めたハンドボール。その普及に尽くして56年になる。「恩師やスタッフ、選手の支えがあったから」。周囲への感謝を忘れない。

不動産会社を経営する傍ら、広島市や県の協会会長を歴任。2001年からは日本協会副会長として国際大会の開催などに尽力した。今年3月の退任後も特任副会長を続けている。

「やっぱりハンドボールが好き。体が続く限り、夢を描く後輩たちの力になりたい」

（中国新聞2008. 4. 29）

永年勤続20年表彰
おめでとうございます。

同窓会連合会では、同窓会役員として永年勤続20年の方々を表彰させていただいております。このたび次の方々が、表彰を受けられました。

監査　中間信一氏（高校13回）

幹事　山本　一氏（高校19回）

事務局だより

修道の大先輩

広島県出身で初の元内閣総理大臣　加藤友三郎子爵の銅像が完成

修道学園の淵源である広島浅野藩の藩校で学ばれ、修道校主　山田十竹先生の門弟であった、第21代内閣総理大臣　加藤友三郎子爵の銅像が中区基町の中央公園自由広場に完成し、2008年8月24日(日)10時から除幕式が執り行われた。
銅像は本体の高さが2.45メートル、台座を含めると4.5メートルあり、1921年ワシントン軍縮会議首席全権として出席された際のシルクハットにフロックコート姿で再現された。

式には、銅像復元委員会会長の碓井静照氏（高校8回卒)、復元委員会のメンバーをはじめ、各界から200名近くの方々が参加され、除幕の儀では加藤友三郎子爵の玄孫に当られる加藤家ご当主の加藤健太郎氏、修道学園　理事長　林　正夫氏ら6人が除幕を行った。

加藤友三郎子爵の銅像は広島財界有志の発起で建立が企画され、内外からの協賛を得て、1935年10月に比治山公園に建設されたが、その後戦時中の金属回収令により台座を残すのみとなっていた。

このたび、没後85周年にあたり加藤友三郎子爵の国際協調による世界平和の具現を称えた銅像が、多くの市民や企業等の寄付金により復元された。

台座には内閣総理大臣正二位大勲位　ワシントン軍縮会議首席全権　加藤友三郎像の銘板がはめ込まれており、銅像の横には、日本語と英語で刻印された加藤友三郎　功績碑が建てられている。

この度の銅像建立にあたっては、広く寄付金が募られ、同窓生をはじめ修道関係者から寄付のご賛同をいただいたほか、修道学園、修道学園同窓会連合会も復元募金に協力をさせていただいた。

銅像の創作者は修道の正面にある山田十竹先生の胸像を創作された吉田正浪氏。

加藤友三郎　功績碑文

加藤友三郎は、文久元（1861）年2月22日、広島藩士加藤七郎兵衛の三男として現在の広島市中区大手町で生まれた。修道学園の前身である藩校や海軍兵学校などに学び海軍軍人となり、その後海軍次官、海軍大臣などを務める。

第一次世界大戦後、わが国は周辺防備のため海軍の増強を図ることの必要性から、大幅な軍備の再編を進めたが、これにより国家予算に占める国防費は異常な事態となって財政は破綻の危機に至り、軍事費を削減してこの建て直しが迫られることとなった。

欧米諸国も同様の事態に至り、国際世論も軍備の縮小が叫ばれる情勢にあった。このような状況のもとで大正10（1921）年11月から翌年2月、ワシントンにおいて主要9か国による「海軍軍縮会議」が開催され、加藤友三郎はこの会議に主席全権として出席、アメリカから示されたわが国の海軍軍備を対米英比6割に縮減する提案に対して、当時の国際情勢と国益を踏まえ、国際協調による平和維持の観点から妥当な線と判断し、軍部の強い反対を抑えてこの提案を受け入れ諸条約に調印した。このとき軍部の強硬派に対して「国防は軍人の専有物ではない。国防は国家総動員の上に築かれなければならぬ。言い換えれば、民間工業力や貿易を盛んにして、国富の裏打ちがなければ国防力は高まらぬ」と述べている。

大正11（1922）年6月、軍縮会議後の施策推進最高適任者として推挙され、第21代の内閣総理大臣に就任。軍事予算の削減、陸海軍の兵員艦船縮減の英断を下し、隣国との協調にも配慮する諸政策を断行して「ワシントン軍縮会議」の精神を忠実に履行したのである。軍事予算の削減分を教育や民生の充実に回したほか、国民生活に直結する諸政策をも進めるなどの業績を残した。

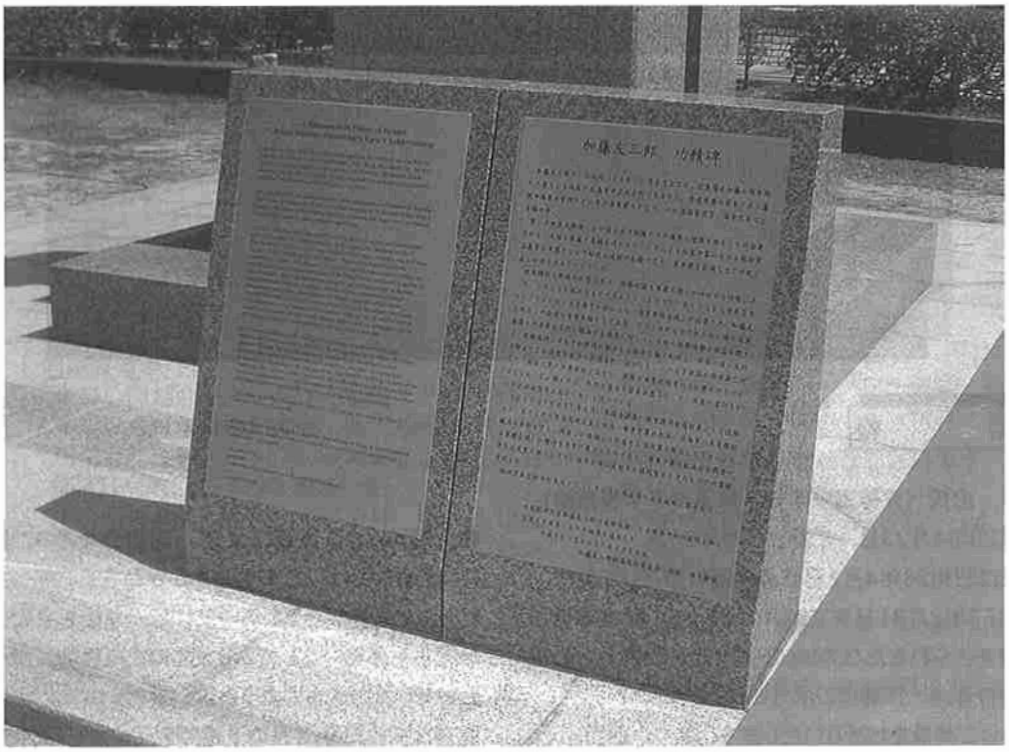
総理大臣在任中の大正12（1923）年8月24日病死、享年63。

内閣総理大臣加藤友三郎の国際協調による世界平和の具現を称え

没後85周年にあたり銅像を復元した。

平成20（2008）年8月24日

加藤友三郎銅像復元委員会　会長　碓井静照



吉田拓郎歌碑除幕式、盛大に開催される

「今日までそして明日から」大合唱 キャンパスに響く

（８月２日　厳粛にそして賑やかに除幕）

仲　井　正　美（広島修道大学総合企画課50周年記念事業推進室）

本学卒業生吉田拓郎歌碑除幕式が、８月２日(土)午前11時から設置場所の「ハーモニーロード」第１駐車場入口付近で行われた。司会は、西田篤史氏（フリーアナウンサー・本学卒業生）、補助司会和田奈津季さん（学友会文化局長）で、プロローグでは「キューバンナイツOB」による演奏があり会場を盛り上げた。最初に川本学長のあいさつ、来賓あいさつは林正夫理事長。白井京子さんの詩の朗読、除幕は吉田拓郎氏、川本学長、林理事長、上野同窓会長、石川後援会長、高松学友会執行委員長によって行われた。

司会の西田篤史アナにマイクを向けられると、吉田拓郎氏は「暑いのにどうも。みんな元気でいてください。」と短いコメントを発言した。イベントの頂点は、ギター演奏による「今日までそして明日から」の大合唱で本学混声合唱団や参加者全員による大合唱となった。大学関係者をはじめ、卒業生や全国から駆けつけた拓郎ファンら約800人が参加した。

（写真：左から吉田氏、川本学長、林理事長）

訃　　報

石井　忠氏（元修道中学校・修道高等学校教諭）

平成20年4月23日　ご逝去　享年90歳

氏は昭和28年4月1日修道学園教諭として就任、昭和53年3月31日まで25年にわたり、保健体育の教鞭をとられまたバスケットボール班の参与として生徒の育成・指導にご尽力された。

心からご冥福をお祈りいたします。

●会報誌へのご寄稿、支部、同期会などのご報告につきましては、ご多忙にもかかわらずご協力いただき誠にありがとうございました。今後も会報誌への記事を募集いたしておりますので積極的に原稿をお寄せいただきますようお願いいたします。次回の発刊は平成21年３月の予定です。